



門
4075

嘉

井上因碩宗直著

永五初春新鑄

隱基妙傳

浪華 竹雨亭藏粹

藏書
遺贈
年三月

41 12509

序

標題

藝之奇者多稱於人而人之奇者
或不容於世江都幻菴井上翁奇
人也非以藝稱者也自知不容於世不
得已以其所擅畜一寓諸某是其技
之所以與他人異模也余嘗論奇之与

文博序

正加陰陽晝夜之不相離然若天奇
而離正若非恆則妄矣孫子曰齊正
相生如循環之無端翁豈有得於此
歟翁之先考亥死於我浪華今年
翁之來遠適會其忌辰祭之日余而
使善歌者唱所謂淨瑠璃謡法然下淚
曰先考無他嗜好惟喜聽淨瑠璃故
奏一曲以抒區慕之念耳請勿恆也余
曰翁之所為不亦太奇矣乎而其出於
孝思則不可謂不正也是可以品翁之
某矣翁嘆而頷之乃出示其所著墓
誌一部曰請以此語弁志首遂書

卷之三

嘉永四年
辛亥年十一月

浪華
竹陰主人
竹嶠
曉棋并書



船工大至山榮少即

學累練兵也

余は、うらやましく六歳の秋、うちふすまへ、じは廻と見え
きくうまうち、お門へよざまと、だいから、文武とまきて、おももま
のをやむに可かあがめの教令黙じてお二の藏井上あひの
義とだらうへ、ゆとりとゆとりお後の日とぞ、わすれ奉
公祐は余まづと、お心怖なまへ、うへや、お慶長
高、我意と、言ふらるる、尋ねて、ゆきはの一助
をなれりたまふせとせんあ

とまとまとて終日喫く均す。勝負小遣きうるを弊
の極きわにやうやく卑屈ひくことよく用ひられせま
士は活世の經濟きなぐさをなげきよとらう。殊ことうも大丈
兵ひょうとすくろくに日うち耽うき。日用の必需と缺ま共
に酒食の奢侈ぜうしとひどやうふむと乗のけり。是を
有うることかへに奇異きびとねく。細末の天あそび
席じやくとの常つねにひづか文ふみ人じんをかくすく。余波よはくら
其華風ごはふうと況ときとす。其華風ごはふうと稱名著めいしゆするの夷國いぎく矣。

貯給用附の置焉自立販部雜所の不配自立の事と考述
され、圖かずより、以社役の放逐と述く。或之役及び多
派のものと後悔作おこてや今その作役なごりせ事代者じめ者しやくのみ
うんと考かうすり、經濟共きんの二途と並ながりて、之は
仰あれども、いやそれ然ぜんとなくんといふ。之は
ハ子こうニ子こと、界かいの計走けいしゆは皆みなうきととくん
あり其書と解讀がくとして思おもひかの一と評ひやくす。夫おはの
ある一ばれく其行こうと考かうすと、したゞく、經濟共きん

の捷徑とす

○世役のる清々岸ヨリ人ハ最初り僧の預金と積金上
支一中道ヨリ亦ハ一日またとキムトモ卷をも取引
ちも又七月或ハ十月の、ふとま案く事もソリヤウル
まきに及一テ空方社よりニコ自の石子ノサシトモケレ
次第マナリヒテハ一日またと風あれ至とナシ役七八をまで
必勝と見シテ、モロコシ外の便ヨナリトシテ經濟の理もあざが
のアリヨリまたも無縫う人の一時ナ全ナス金積モ

番てニニ月中の飲食と修理歟のあり費やムトモヒ
ヨリヨリもしてハ庵岐^{リハキ}精簡^{キクシ}と集^シニ往^カ奉^カト學
ホーマー教の教^{トナヒトトシ}と貴^{ツシム}ト^{シテ}たと傾けぬ^{ハシメ}
モリ有^{アリ}ムかね^タ名將^タ僅^シス十石百石の御^ミと與^カフ
委^カチ^カ候^カテ三都^ミ六郡^ミ村^ミト^シ馬^ミと^シやまと^シ行^カフ
トナリ

○甲越の兵ハ牛角たりとつ^{アシカ}也^カと自^ト行^カカ^シト^シ
毛湯^{モダ}ニ留^カヘ^リ甲兵^カニ馬^ミト^シて自國^ミの戦^カリ^シ兵^ミ

八千人わせんじんと敵てきをもての城しろからて甲列こうりゃくに信譽しんよをうけ
戦死せんしきせざるが故ゆゑ後ごハ名士めいしき一人ひとりへ傷いたらまのたゞただ一いつ枝えだと頭かしらをす
海かいトれハ甲列方こうりゃくほうに子置こおきく十日じつ作つく成ならこなうモウ湯濟氏とうさいし云
信玄しんげん徳とくはと思おもうと虎とらのとらと立たちたる

○武人の言ことと基程きせい相謀あいぼうの遂とげりてハ文ふみハ成なりことを示
甚ひそ一ひと月つきを篤こころなりうて湯ゆまゝ禁きん付つけと令こゝせ義經ぎきんと宗慶そうけいと会
そく六十日じつかか一いちじよ達たつ取とく敵てきととそんや

○歎たんの如ごとか半はん敵てきと成な委まいと美うつくしうつくて我わ不ふ二に百ひゃく歎たん不ふ二に石せき

ななくもあらとすゆと思おもひと各かくまへ棄きてまづ歎たん二にすすめ
ささくとづきづき一ひとだがあれあれとぞとぞ初はじのの人ひとをすれ
ままかかてすよよかか小こうつよよななきき本ほん來らいを埋うめうてて故ゆゑに
終つて大おほ敗ひととうなりぬぬとままと獲とてて必ひ勝ぜすうう戰たたかととし
掛かかかたたき

○再局さいきょくと空うつかかりと考かんすすハららに大おほ敗ひととうも敵てき
の心こころなりて考かんすす一ひと孫まごされ所ところ謂い被は初はじ已い百ひゃく戰たたか不ふ殆たるととる
ととチ古いわきの確たしか篤こころ也や謂いつつてて一

○毎局三思とかくまかよとおもひと放さんとせり
時々七言の一句もうりに洗吟へて見まわしるは
トやと思ふてとぞ考案するべし眼は大に見
やりハ小くらまく見ゆるをあひながらよき通じ
考へて大きめのあくまくを告むはなしや思ひへ
古くまづくとゆひとまづサ試んとゆすとせりて
うへて

○末連より本年十月の後より一月の先とす

ト吉地りり園じき鍛内の兵糧と運びとく手均一
取手一石五斗と仰りく草席と信ふとくハナダ殊事可得
食欲一疋當前二十疋則是也

毛氏解題
卷之二

謂也。人和庵上主雲石有者。下句曰：「向」。

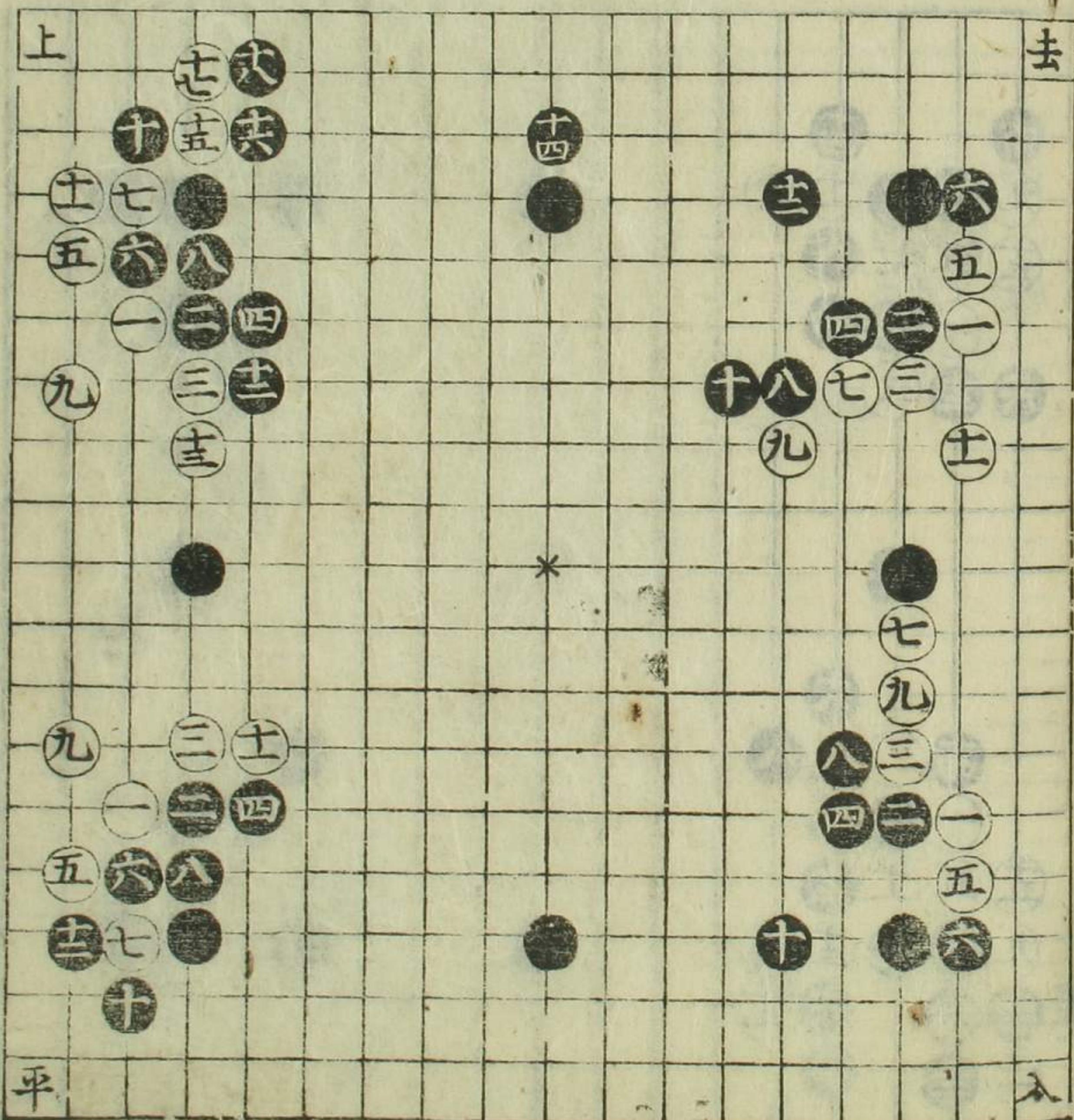
和永年畫

舊約全書

9

P
二

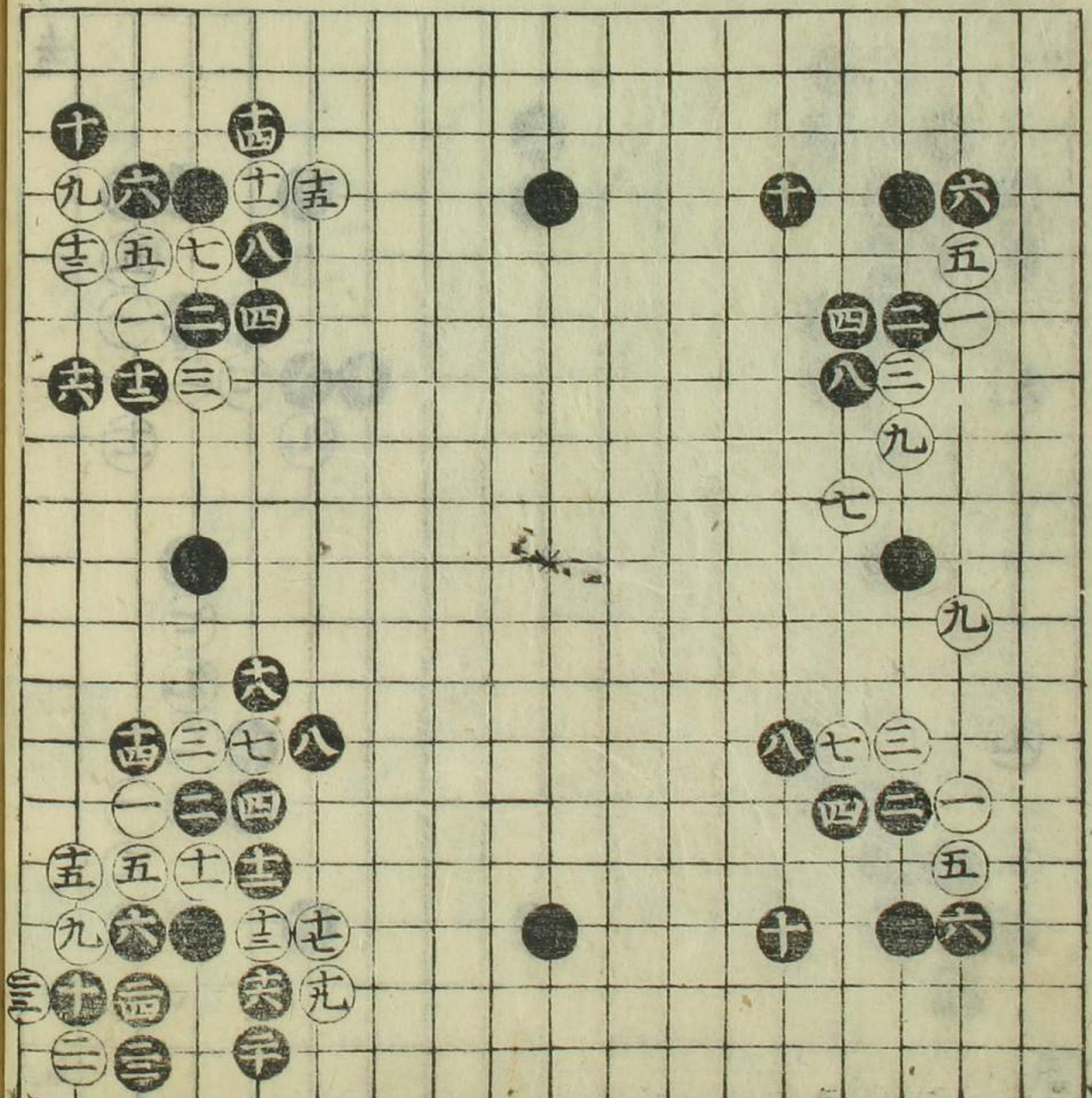
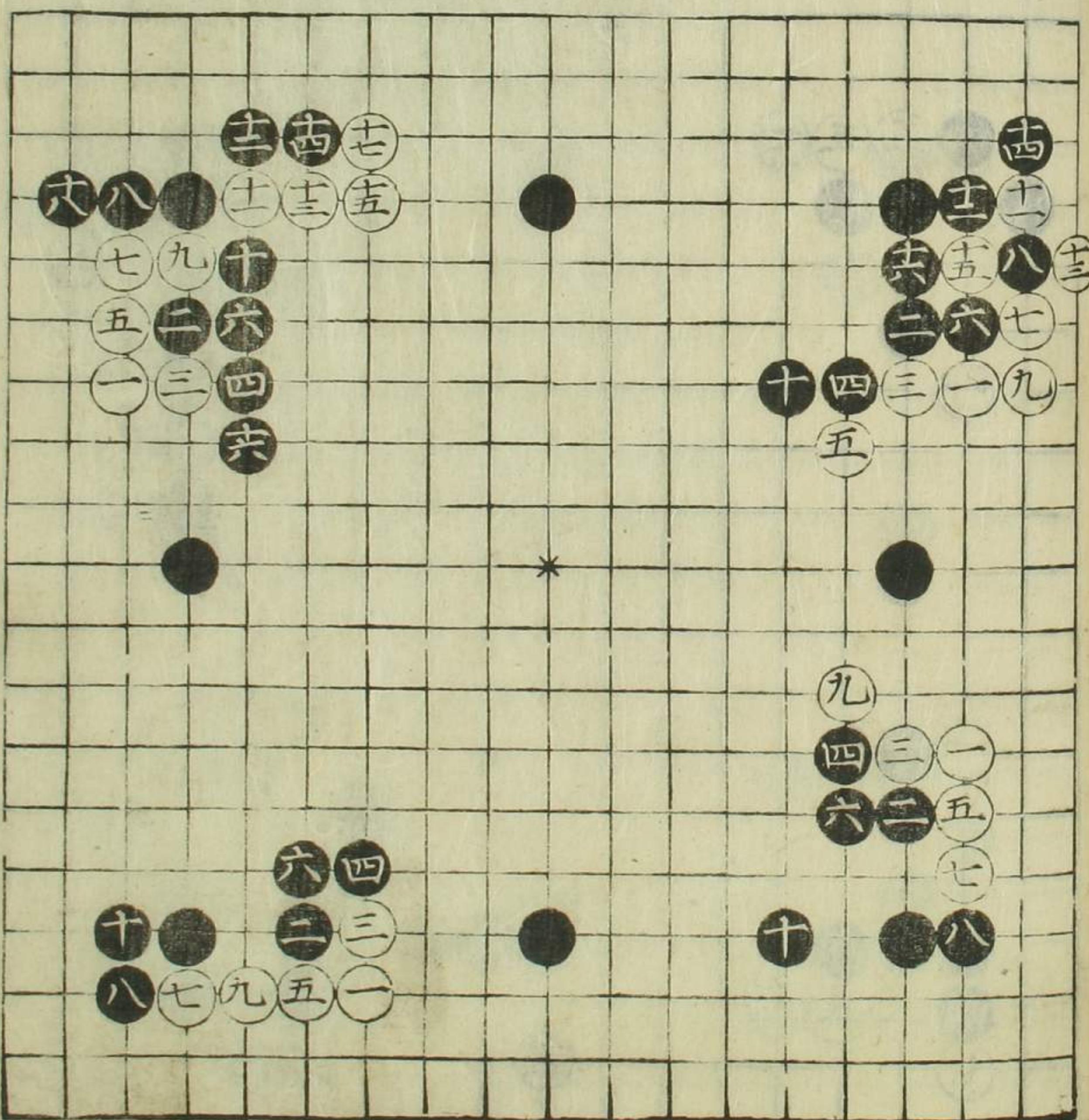
八子ト制目ノ立ハ同計
六子七子モ全斷懸テ
真中ノ置石ニ附テ別
ニ打方ハナキ一ト可知
ニノ附ハ秋山仙朴之
新ユ夫尤吉併悪キ
手ノヨキ手ト評セレ
ハ不可也至テヨキ手
ト可心得

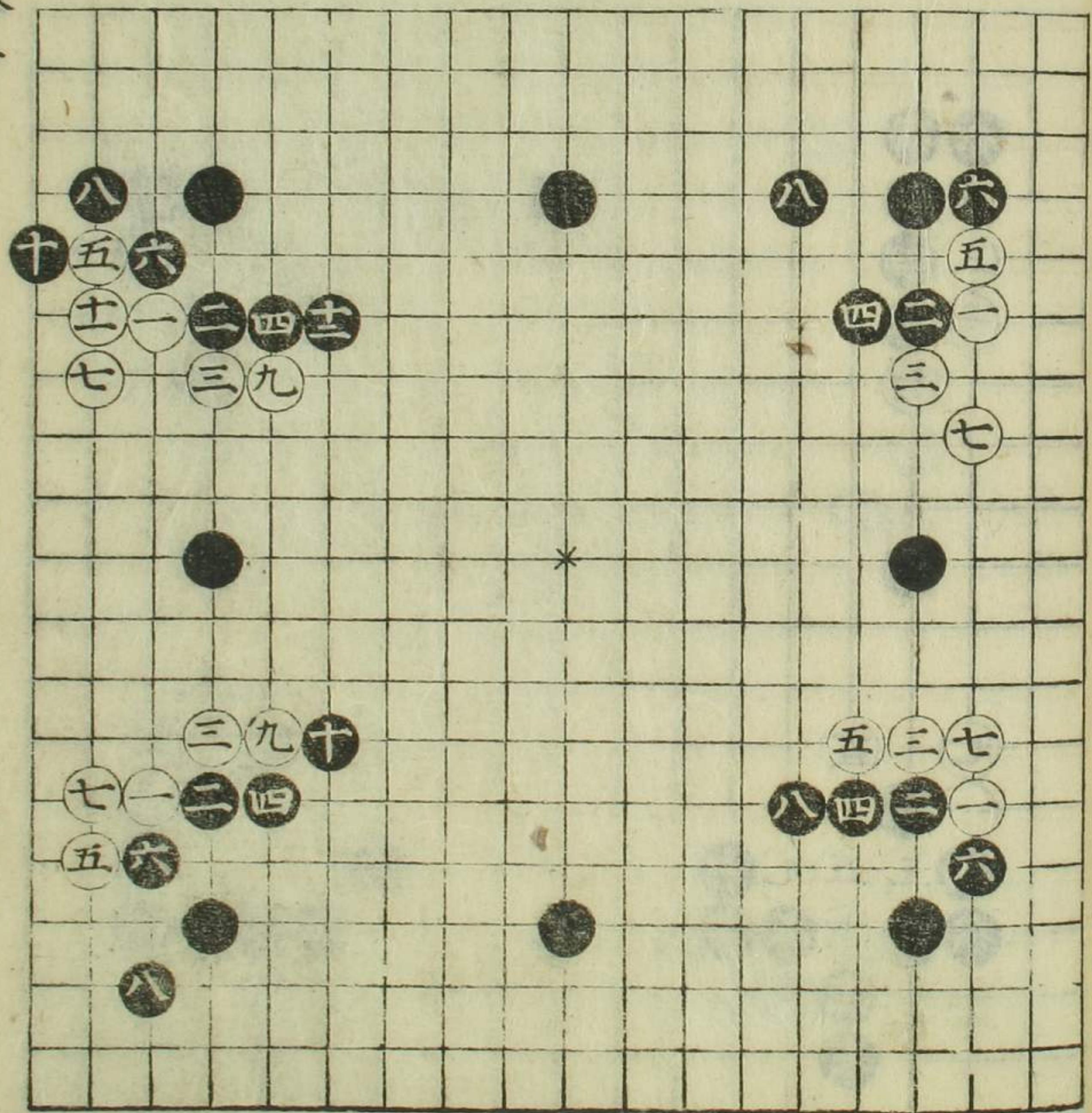


平上凡白大ニ無理
ナレ凡至テ初進入
ニ受方ヲ記スノミ

去八ノ一目ヲ捨ハ心
持ヨシ

四隅凡二ノ手ハ上ノ
白七ノ所エ尖ヲ古来
ヨリ定法一云トモ余
惟フニ如是打方一隅
コトニ早ク序付テ可
然





平去入凡白三ノ手無

理也タトヒ征ノ中リ

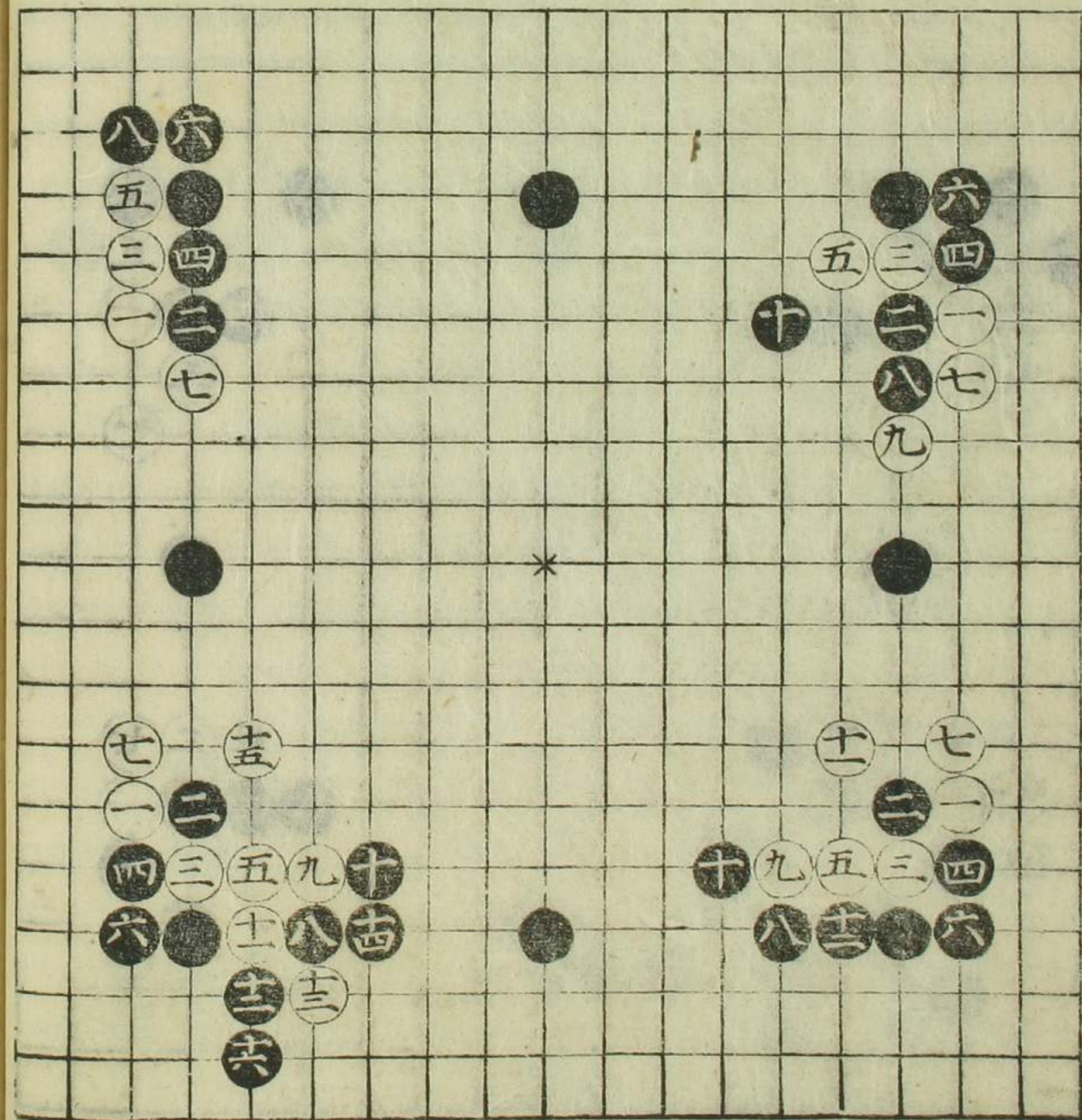
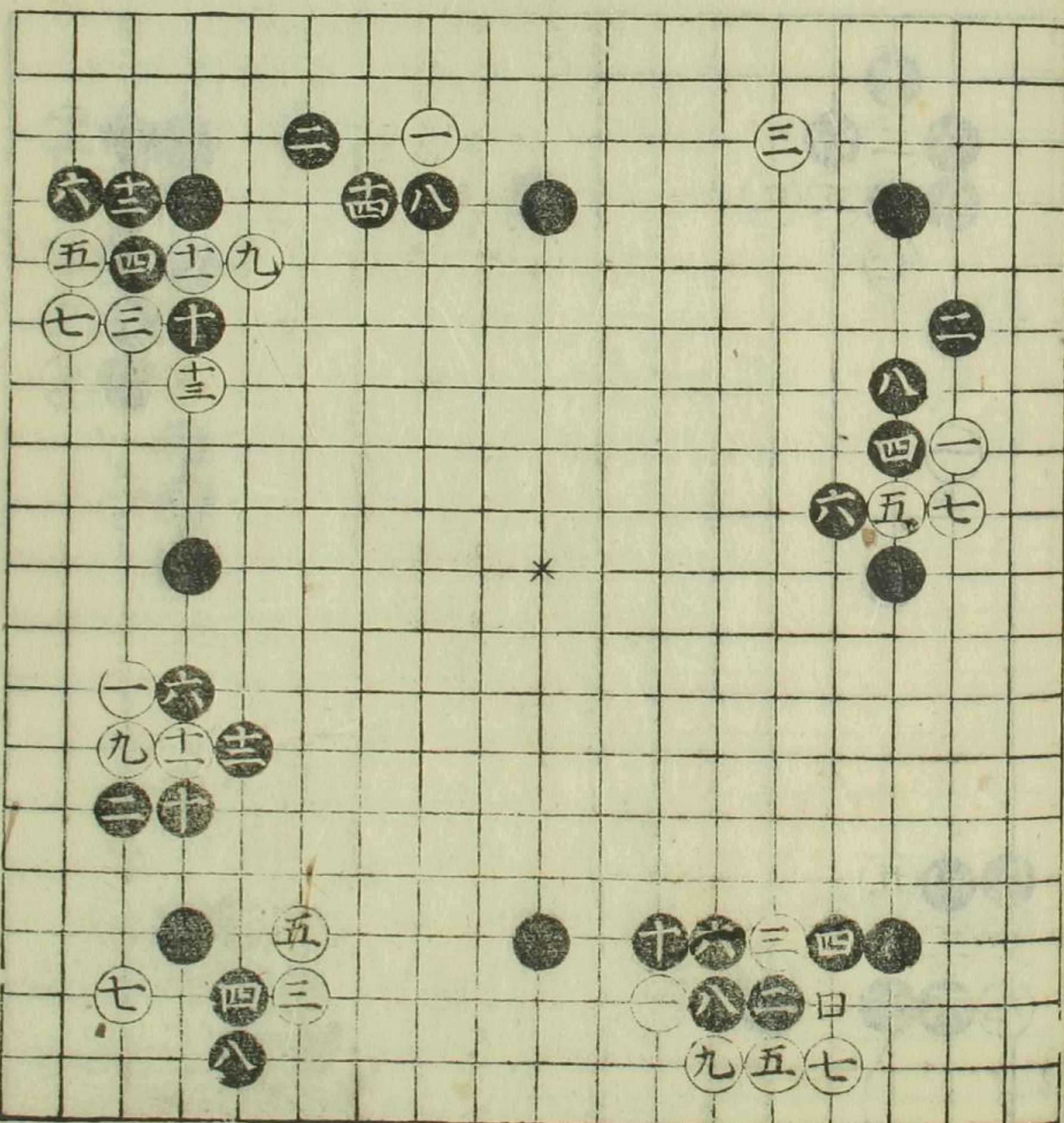
ナキ時ニテモ黒方

徳ト可知

上ノ隅白三ノ手不打

ナレ凡為心得記

上黒六ノ手二ノ石小斜
走故ヨシ大斜走以上
ナバ十ノ所工打白七
ノ所工祐時△印可
云云
入雖如何初進ノハハ
兔角四ノ手ヲロ印エ
引タル故記之



平上共白大ニ無理

ナリ

去入ノ兩隅ハ子モ置

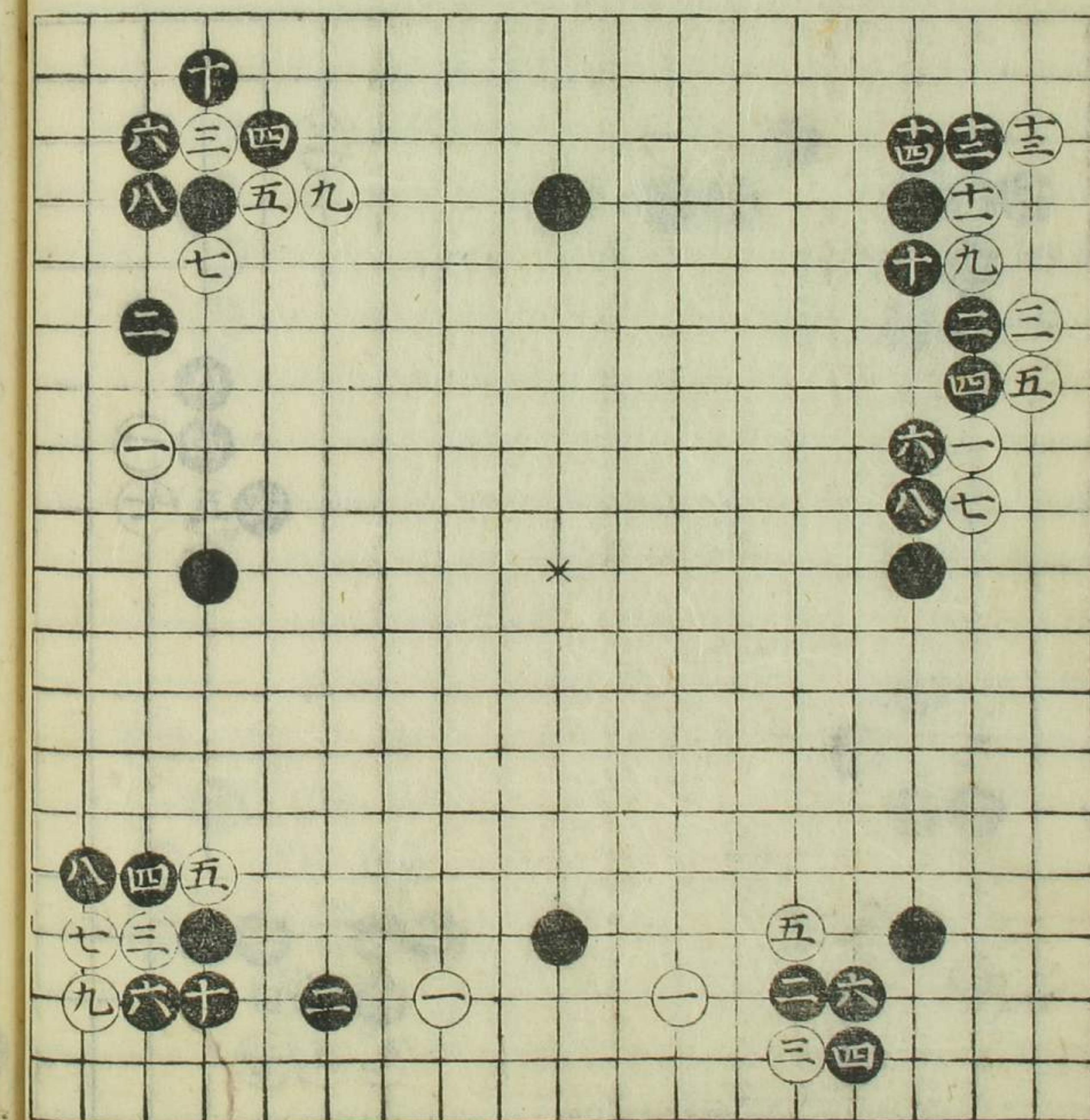
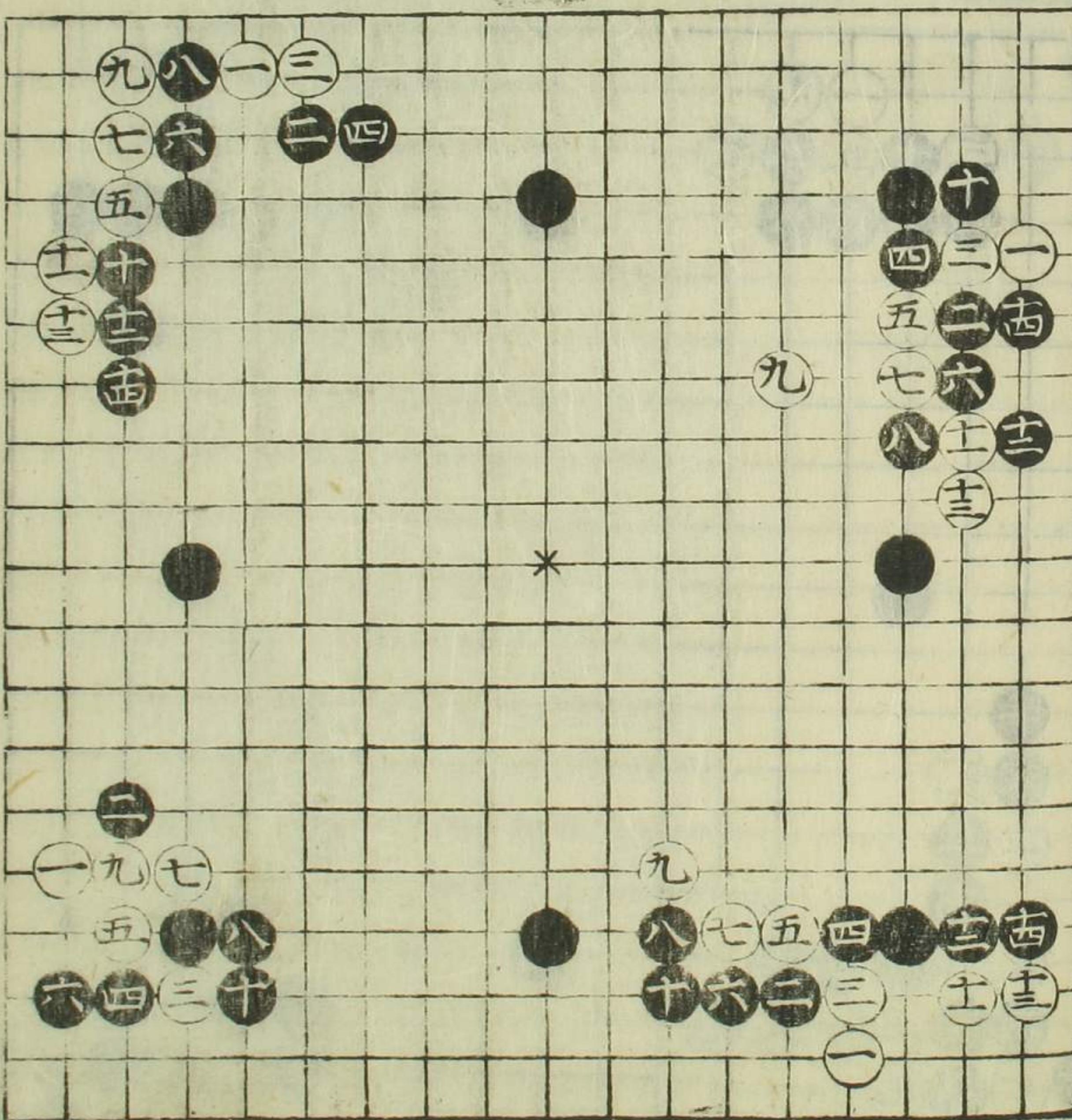
テハ去ノ方ニシト心

得テ可然無紛一

續ラ置碁之序一ト

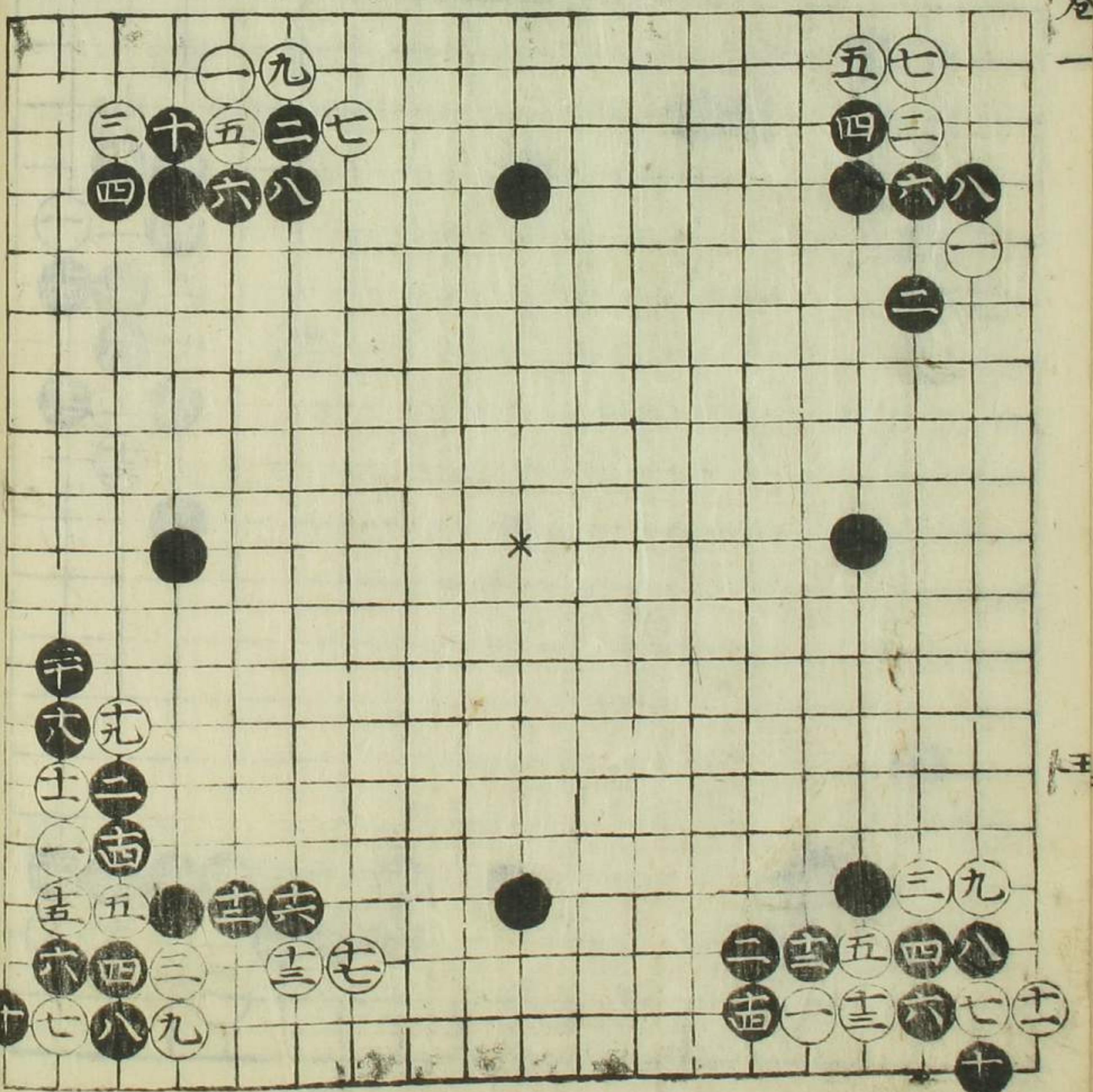
スル故也

四隅凡白ノ一ノ手打
サルヲナレ凡為初心
記ノミ

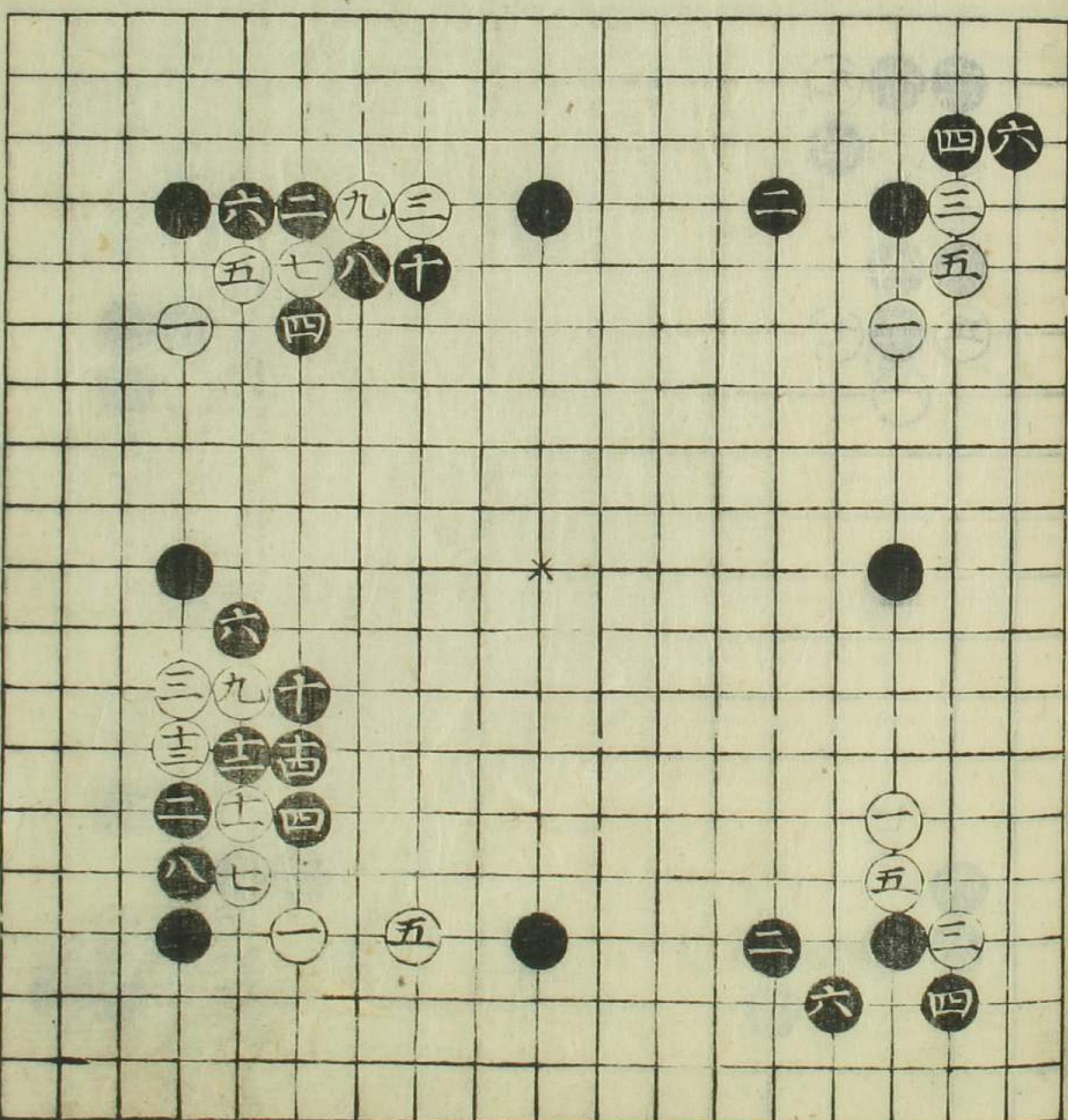


前評全斷

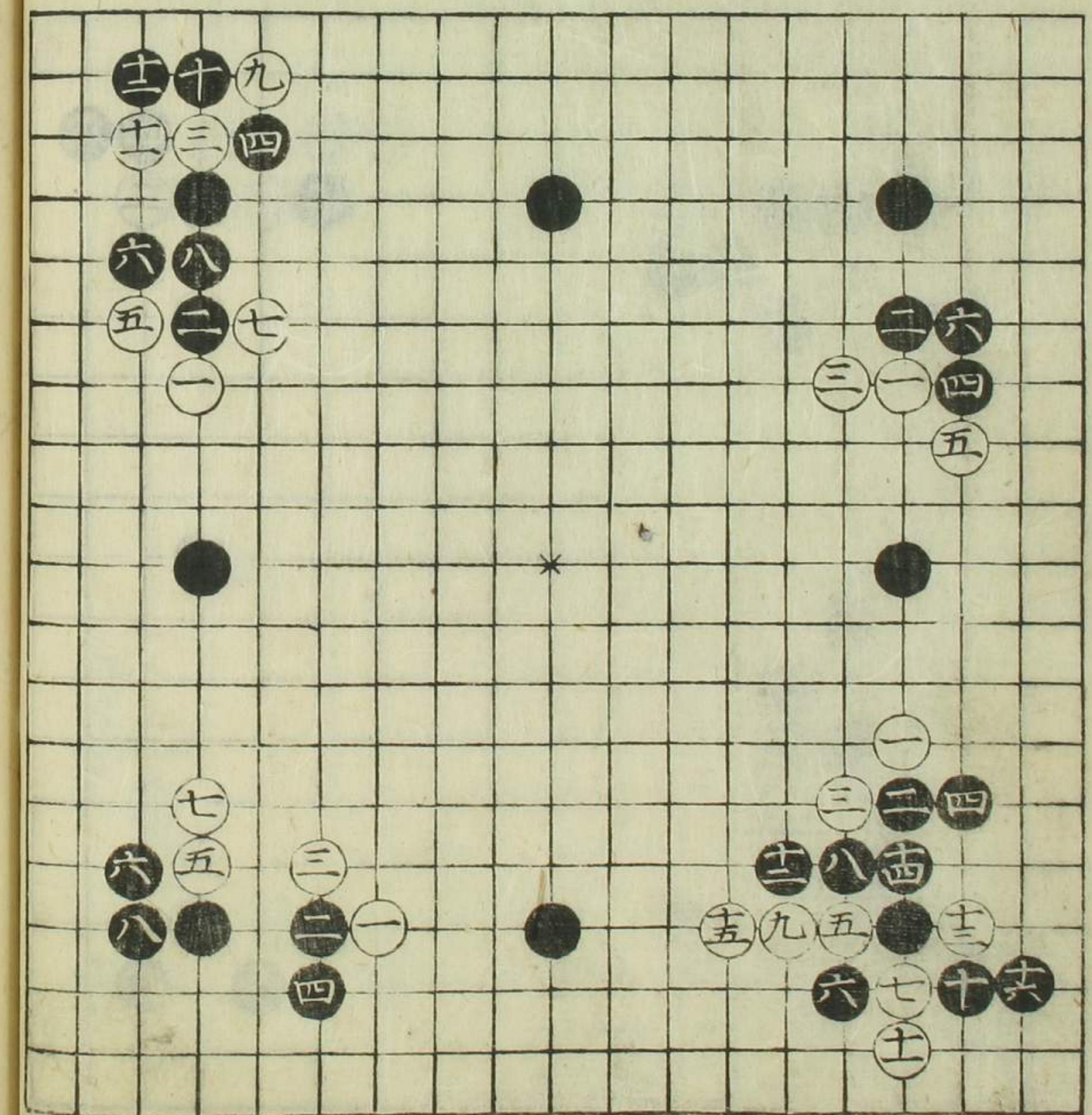
妙石 卷一



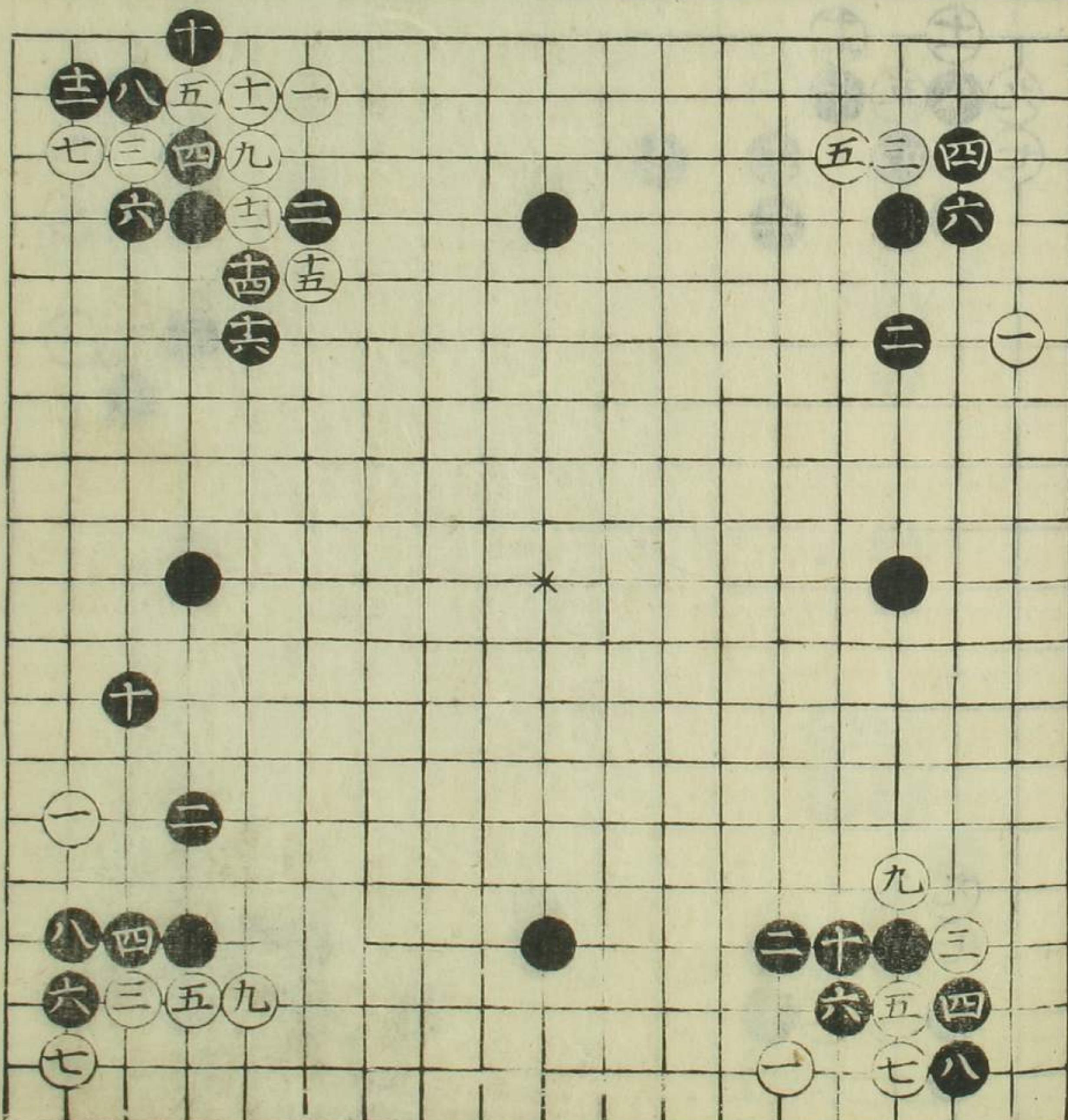
白一下四ノ筋工高ク
打來ル時ハ黒モ如
此四ノ筋工高ク受
ヘシ照部因淑新
工夫也至テヨニ



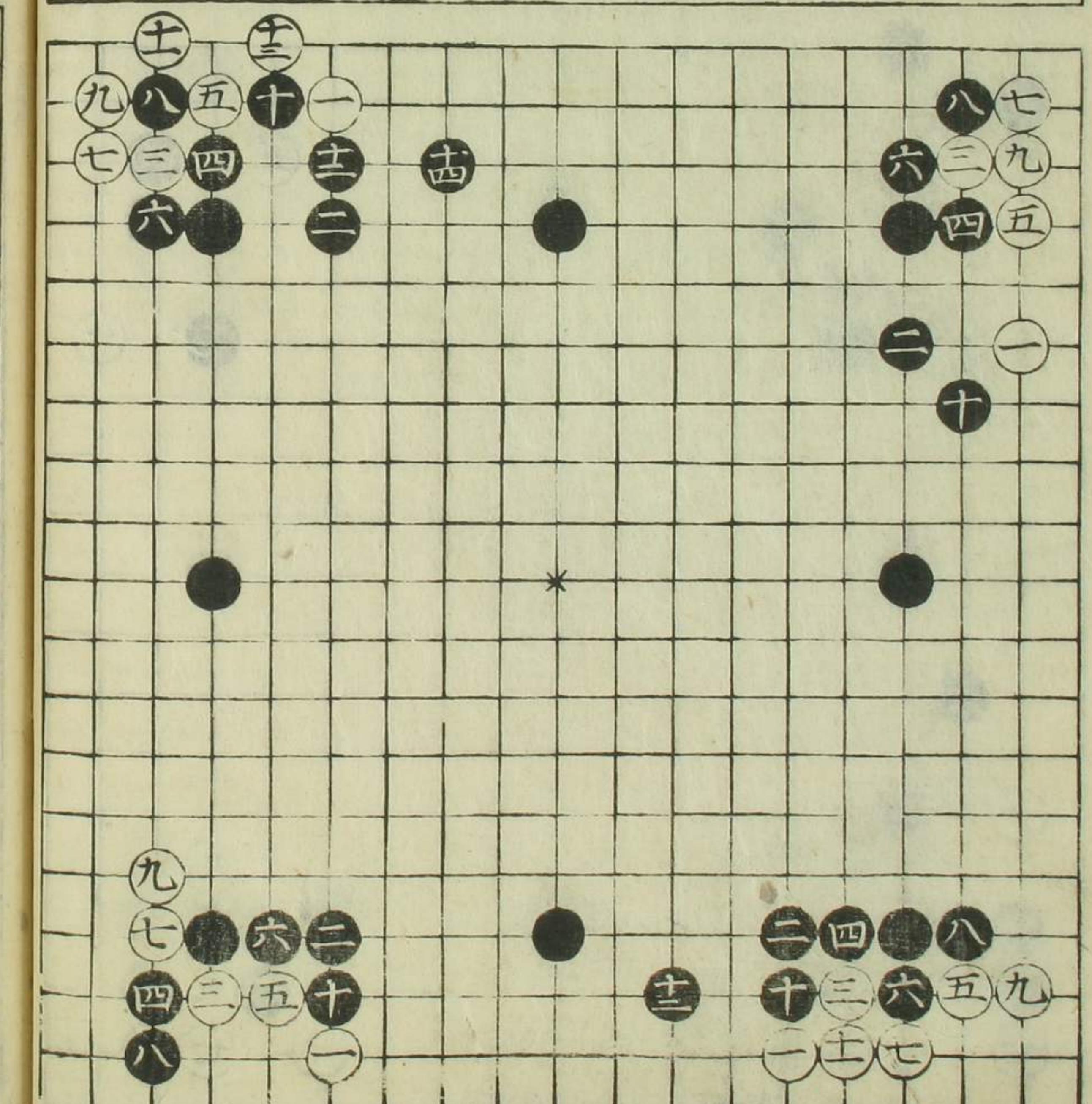
黒二ノ受方因淑新
工夫尤ヨレ但上隅
六，所立尖毛不苦
平隅ニノ手ヲ七，
所工飛毛不悪



白一ノ手ハ絶テ不
奇更ナレ仄為心得
記スノミ
上十ノ手此形ニテハ
不打方ヨシト可知



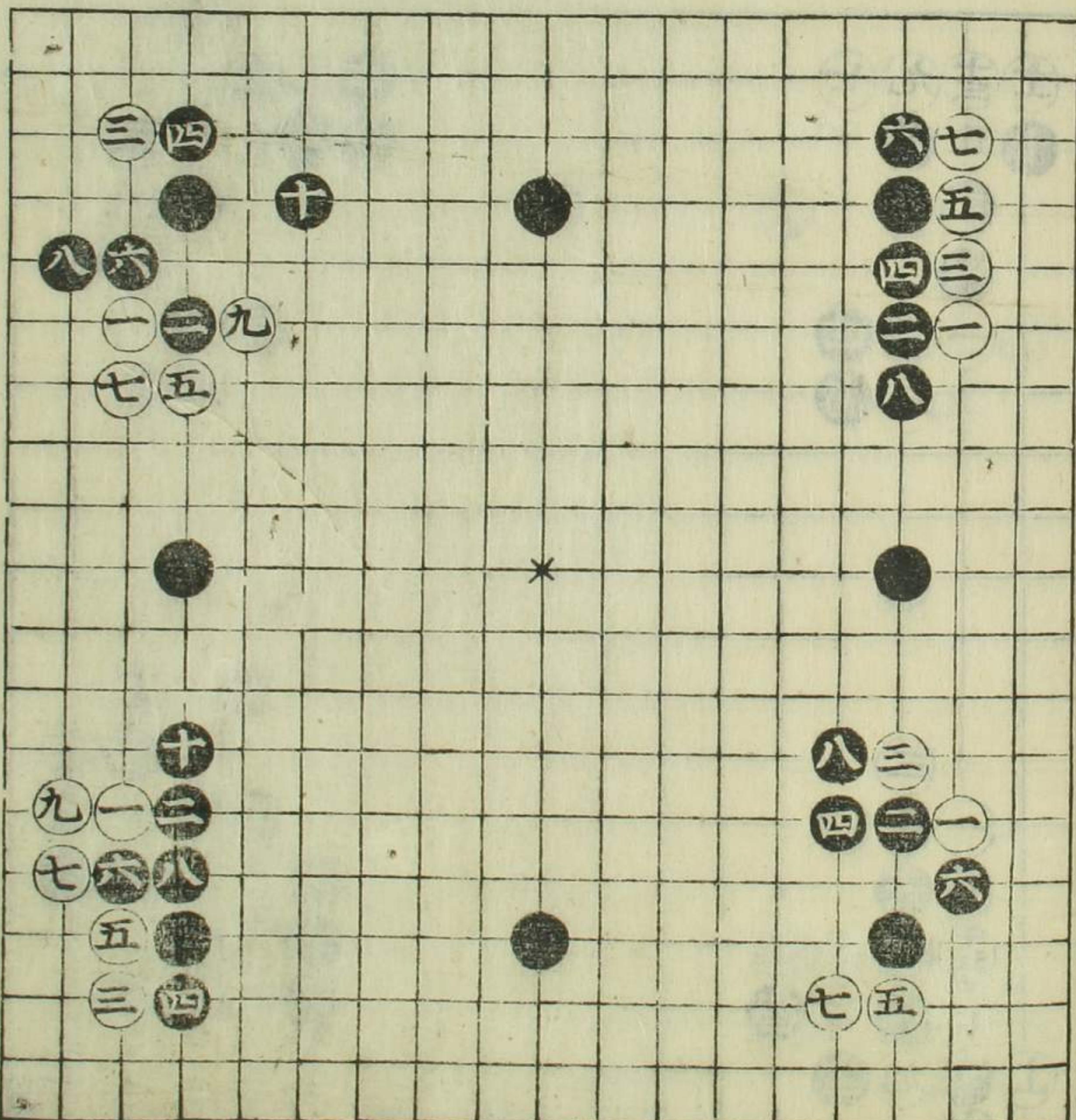
二十二ノ手ヲ十三
ノ處工打テモヨシ
平白無法
去十ノ手外ヲ打
方ヨシト可知



入ノ隅白五ノ手十一也
因碩十二歳ノ時下手
コマラセノ新工夫黒
如此打ハ無紛

平去ノニ隅凡白ノ打
サル手ナレ凡一通り
記之

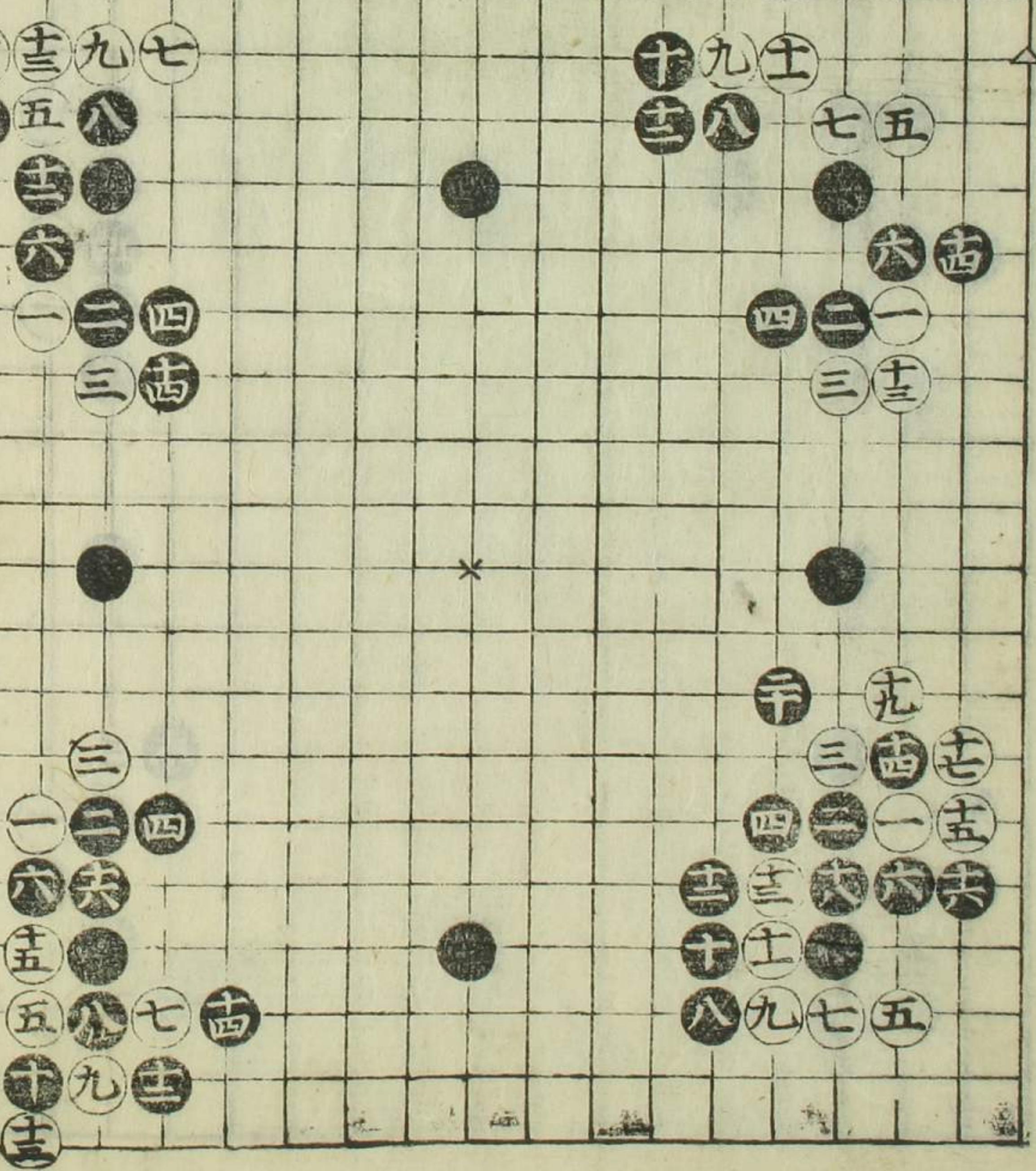
上ノ隅黒凡ヨシ



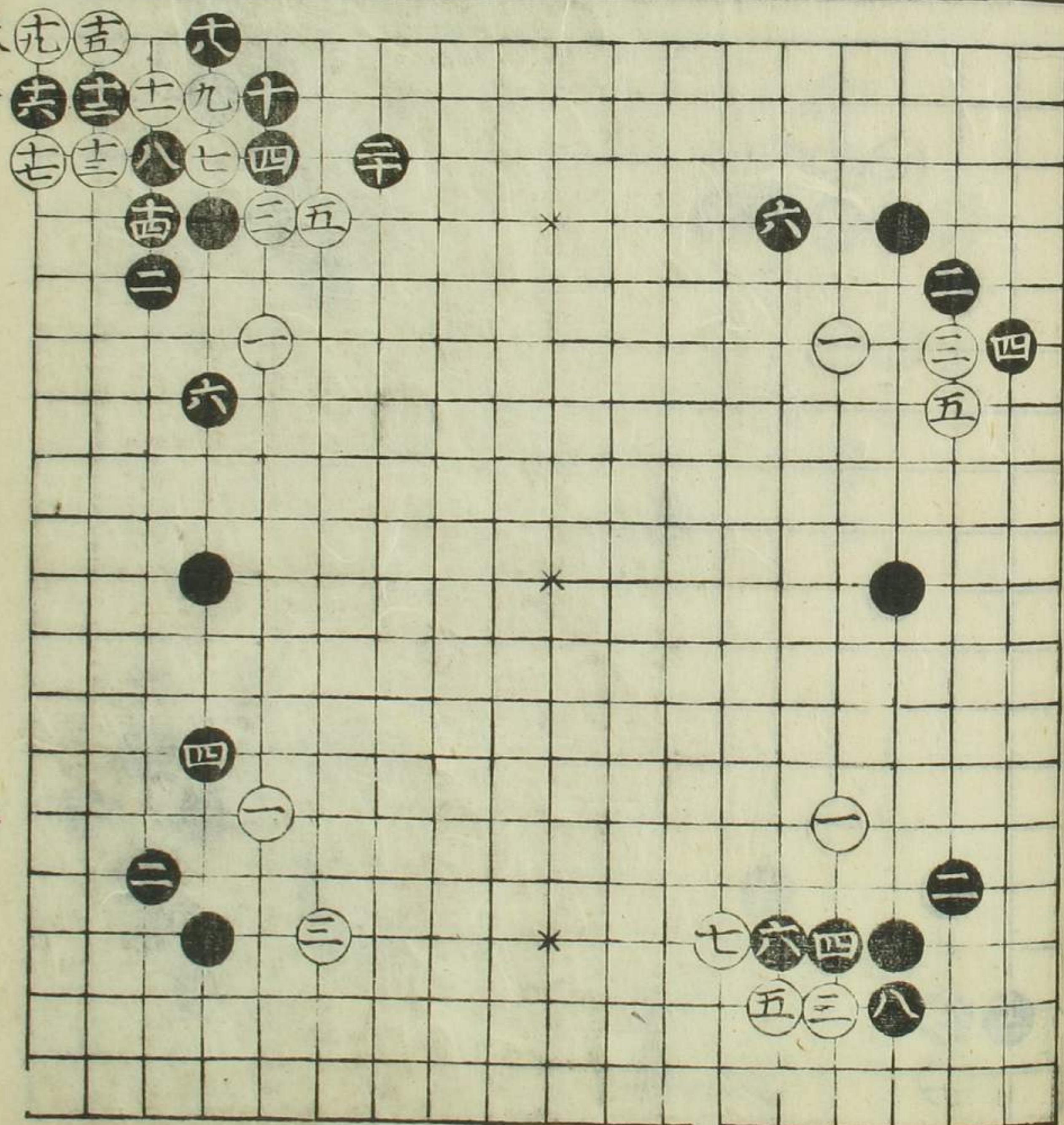
去白十三太ニアレ、如
此ニテハ△印エ打ハ
白死也

上白十一ノ手ヲ十三ノ

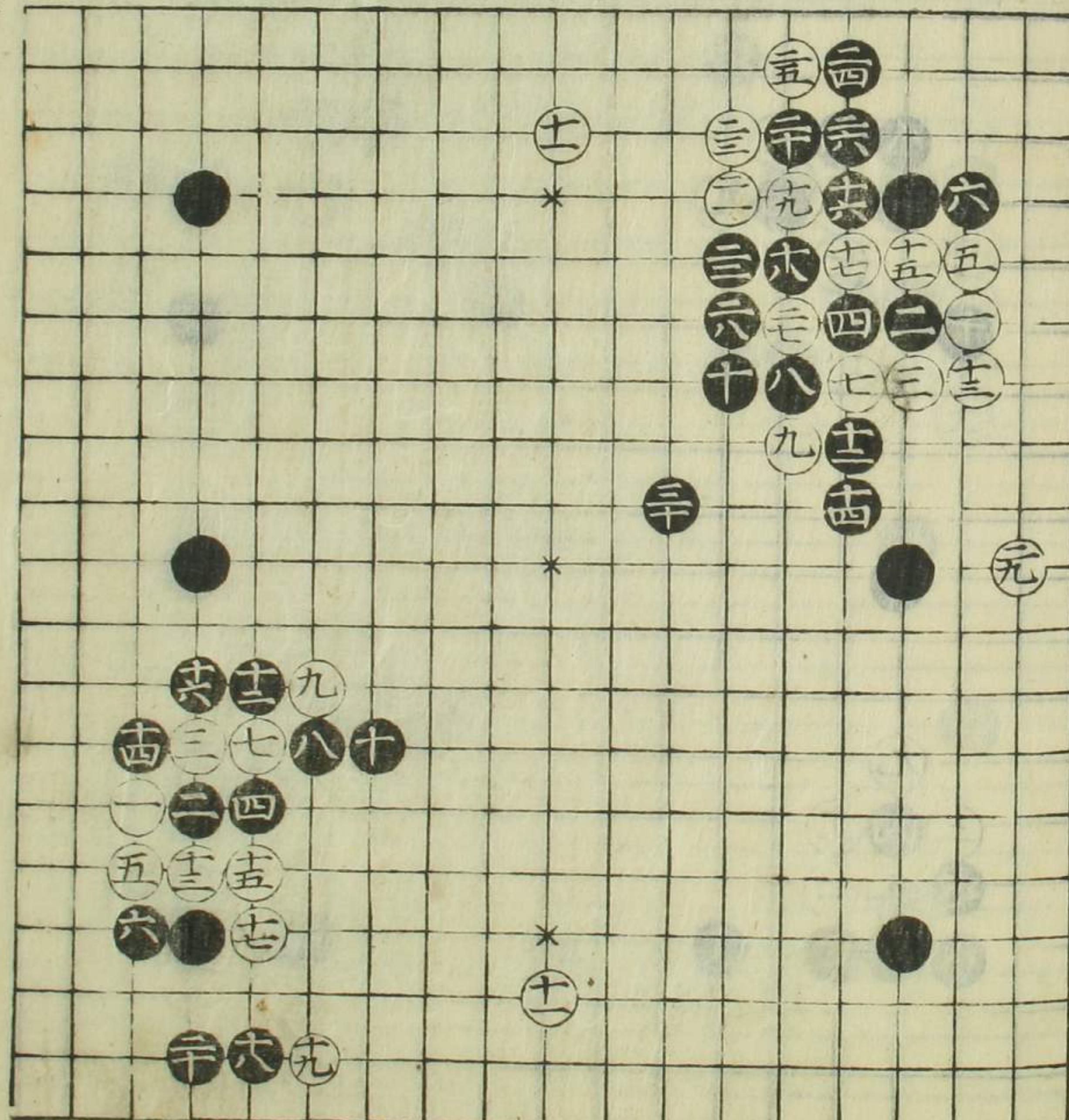
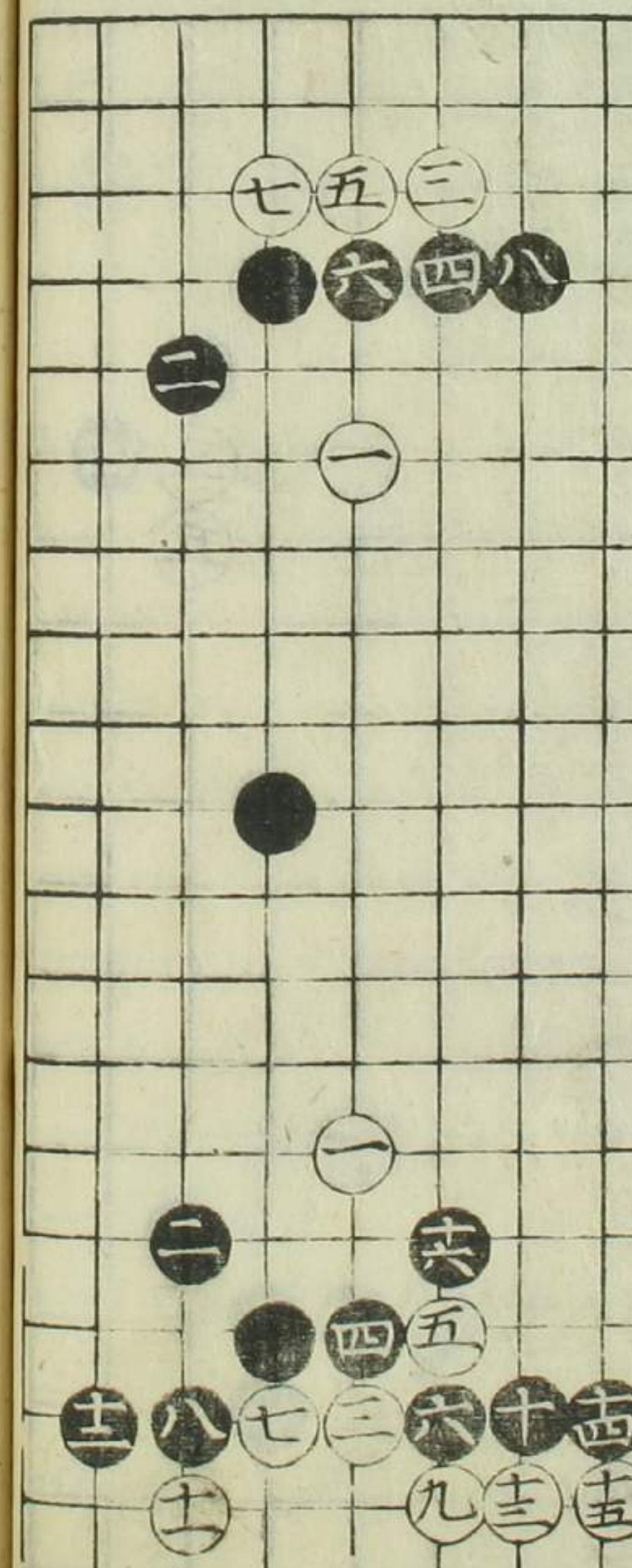
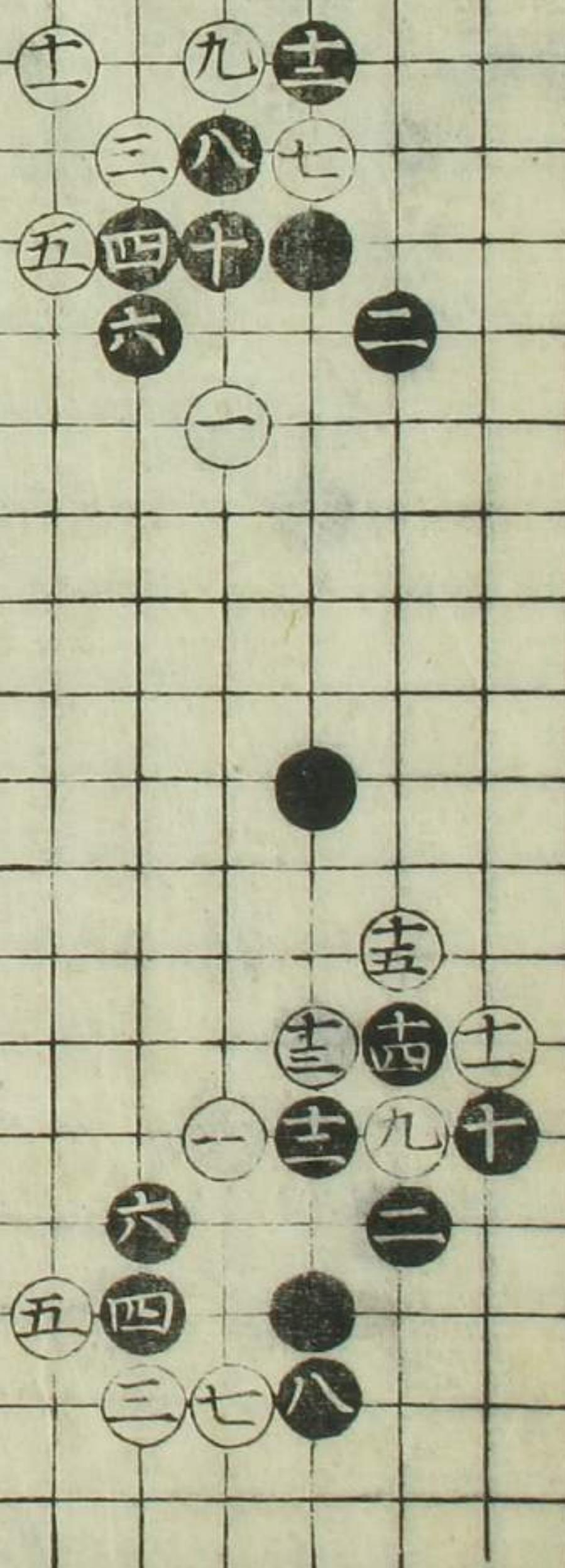
所エ打テモ矢張十
四ノ所エ可打



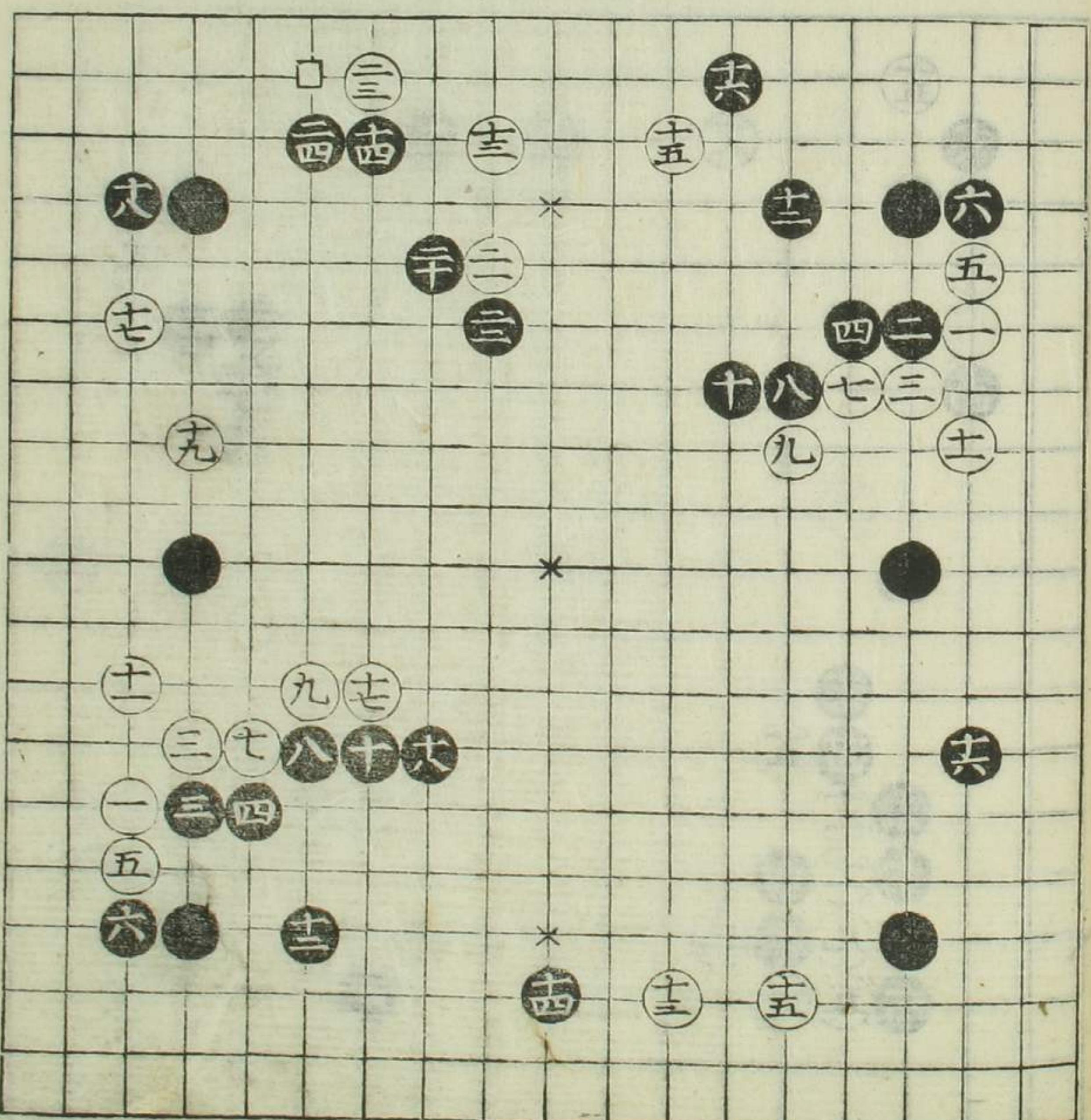
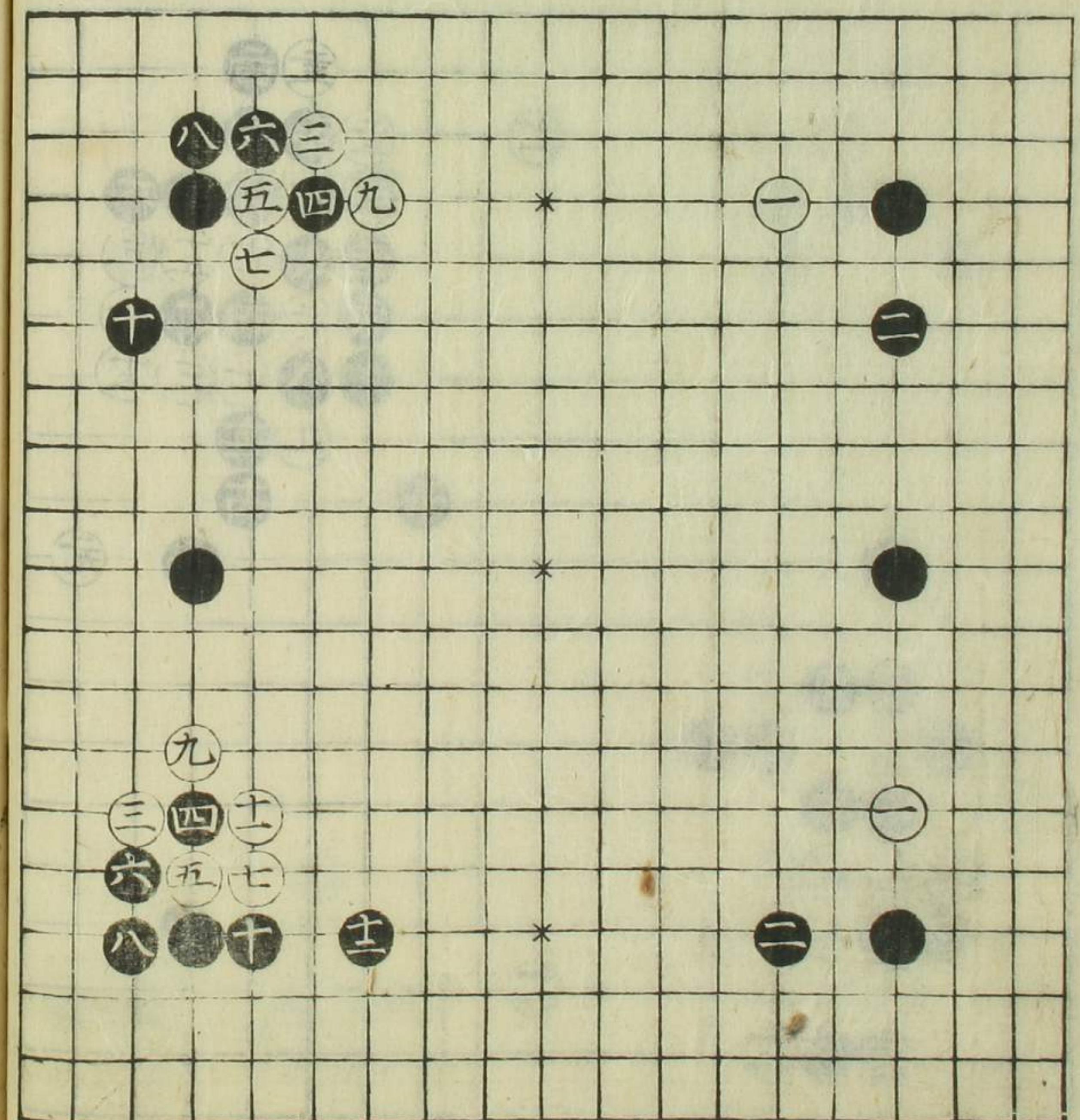
白一ノ手無法ト
可知



六
着



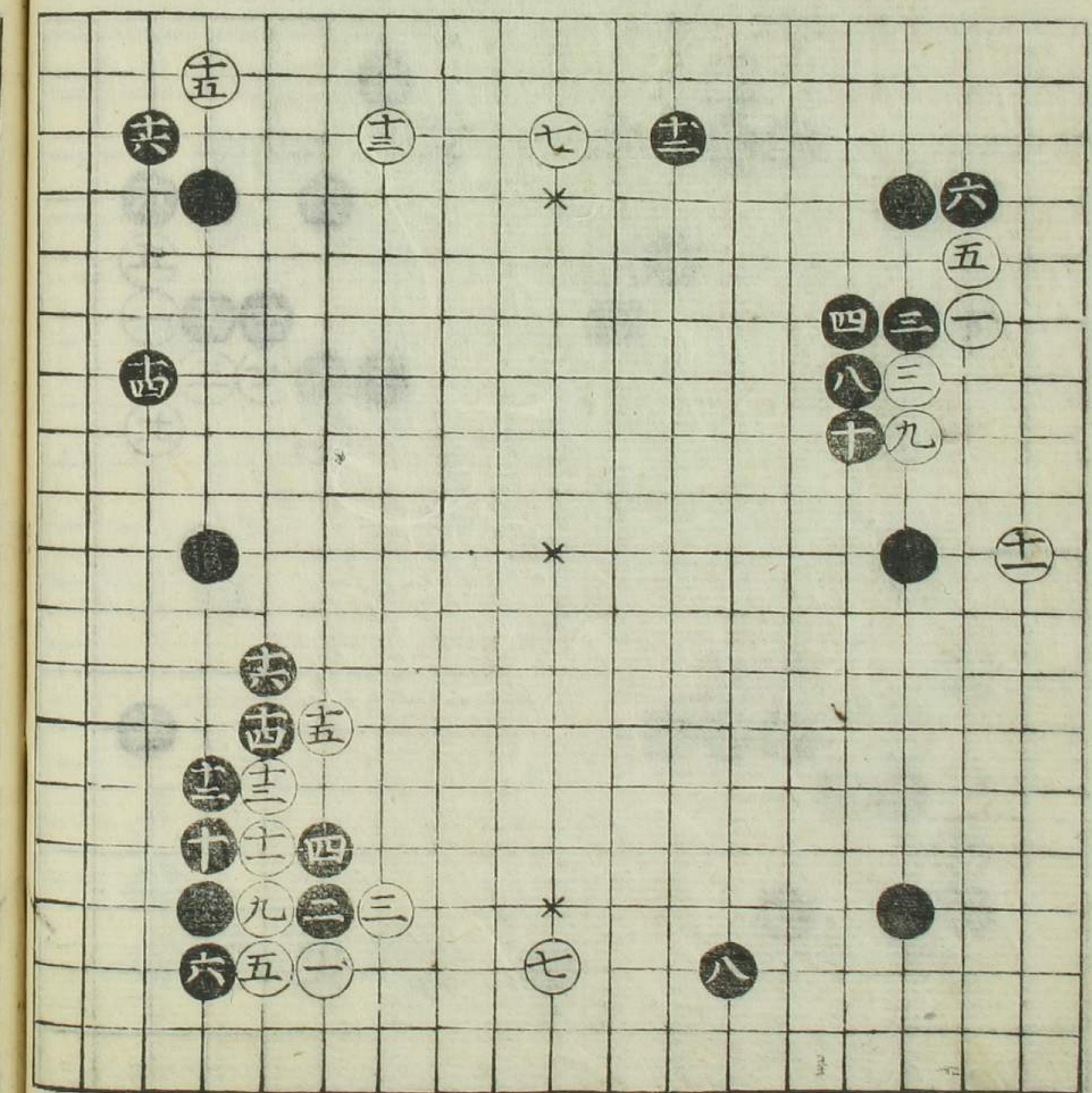
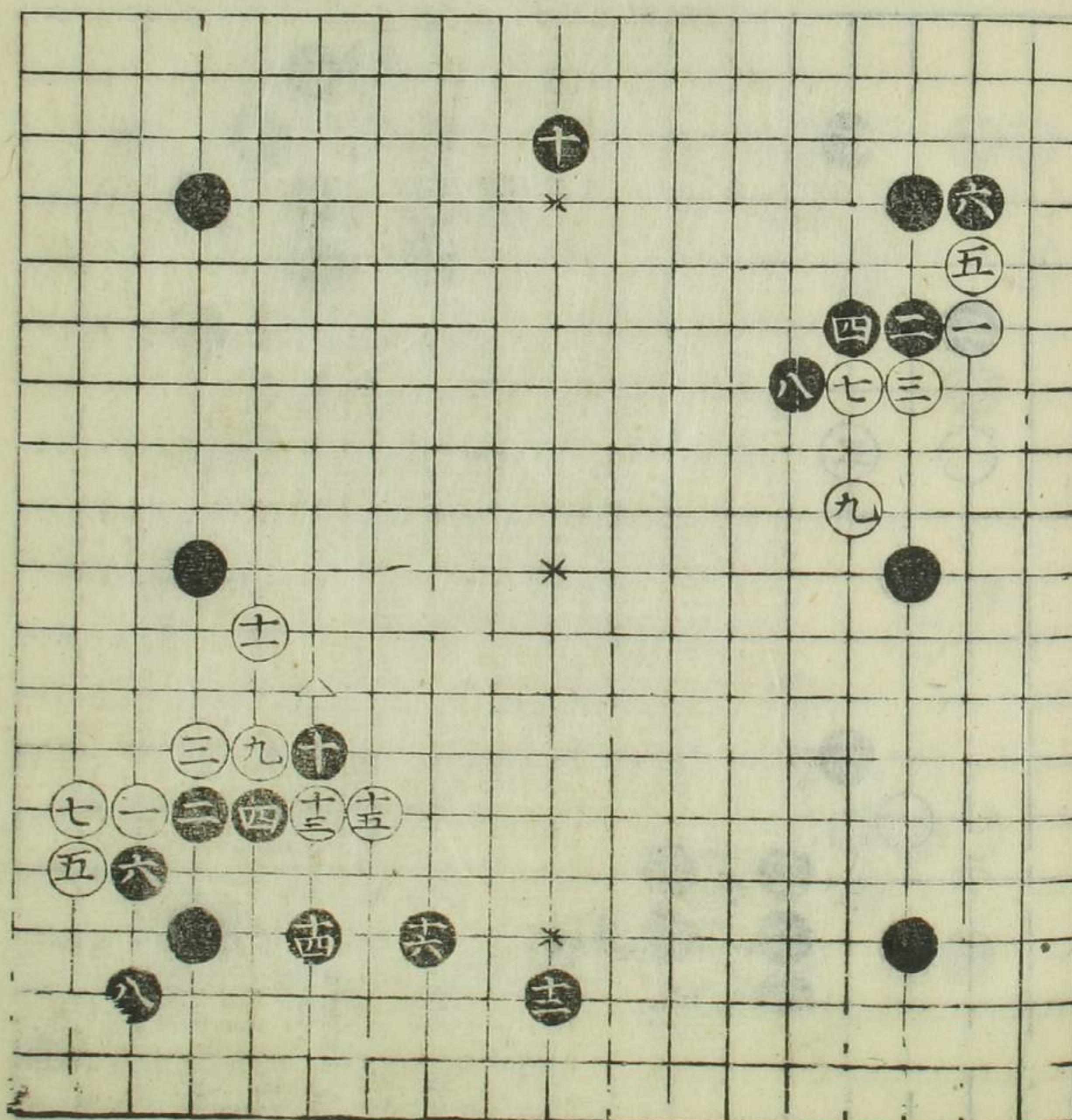
白十一ト打テ十二ト
处ヲ捨置「ハナク
レトモ是又至テノ
初學ニ示ノミ



上隅黒二四ノ手ヲ
印エ打バ白ヨリ
二四ノ所工切ラレ
テ忽紛レヲ生ジ初
進ノ人ハ大敗トナ
ル常ニ有形ナリ
能々可心得

上隅黒八ト十ノ二
手五子以下ニテハ
決テ不打悪手ナリ
併六子以上ニテハ
大ニヨレ
下隅二ト四ノ二目
ヲ捨ル心得太ニヨレ

上隅十ノ手ハ服部
因淑新工夫大位ニ
シテ尤ヨレ
下隅白十一ノ飛ナ
キトキハ△印エ打
ヨシト可知

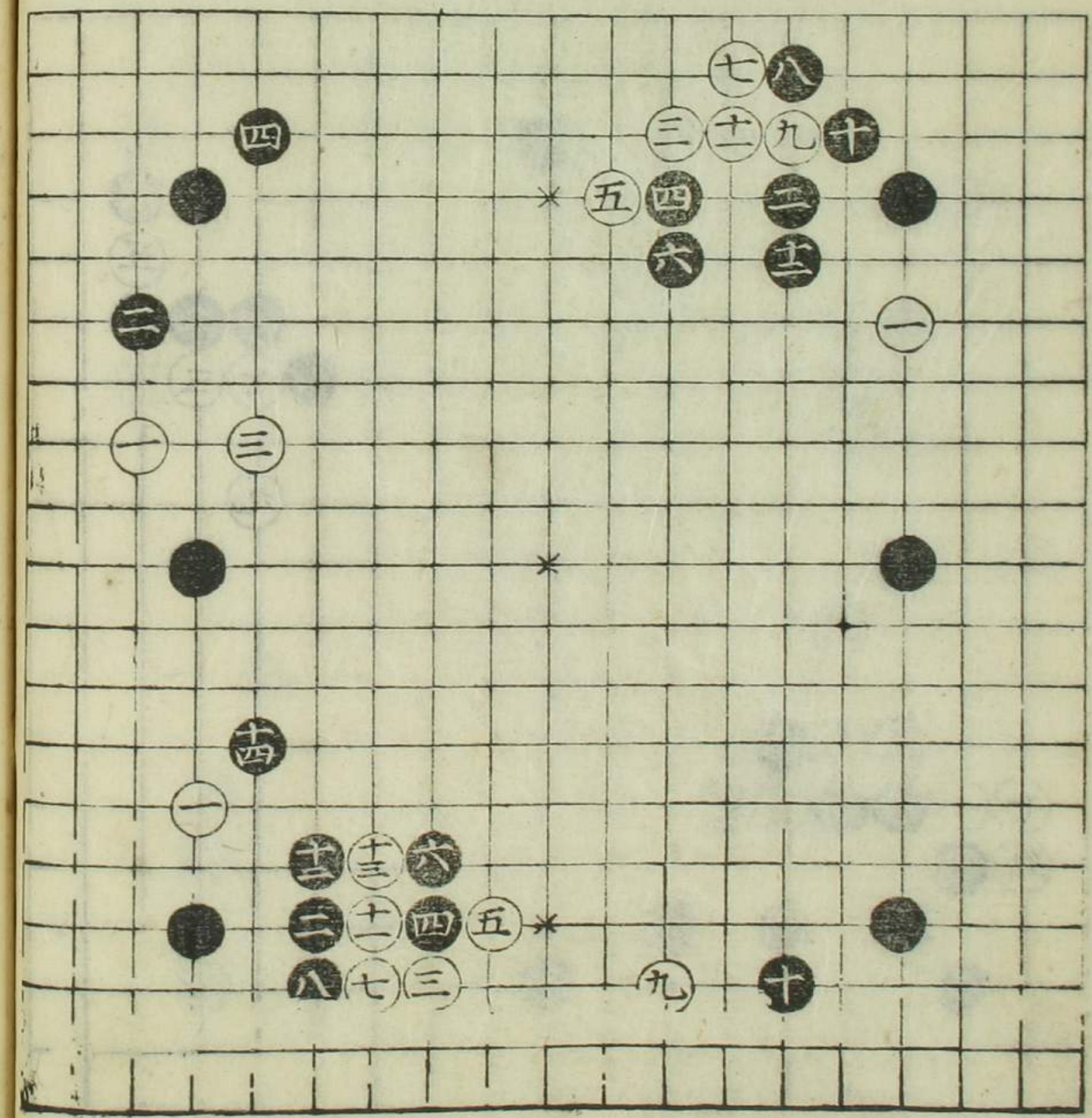
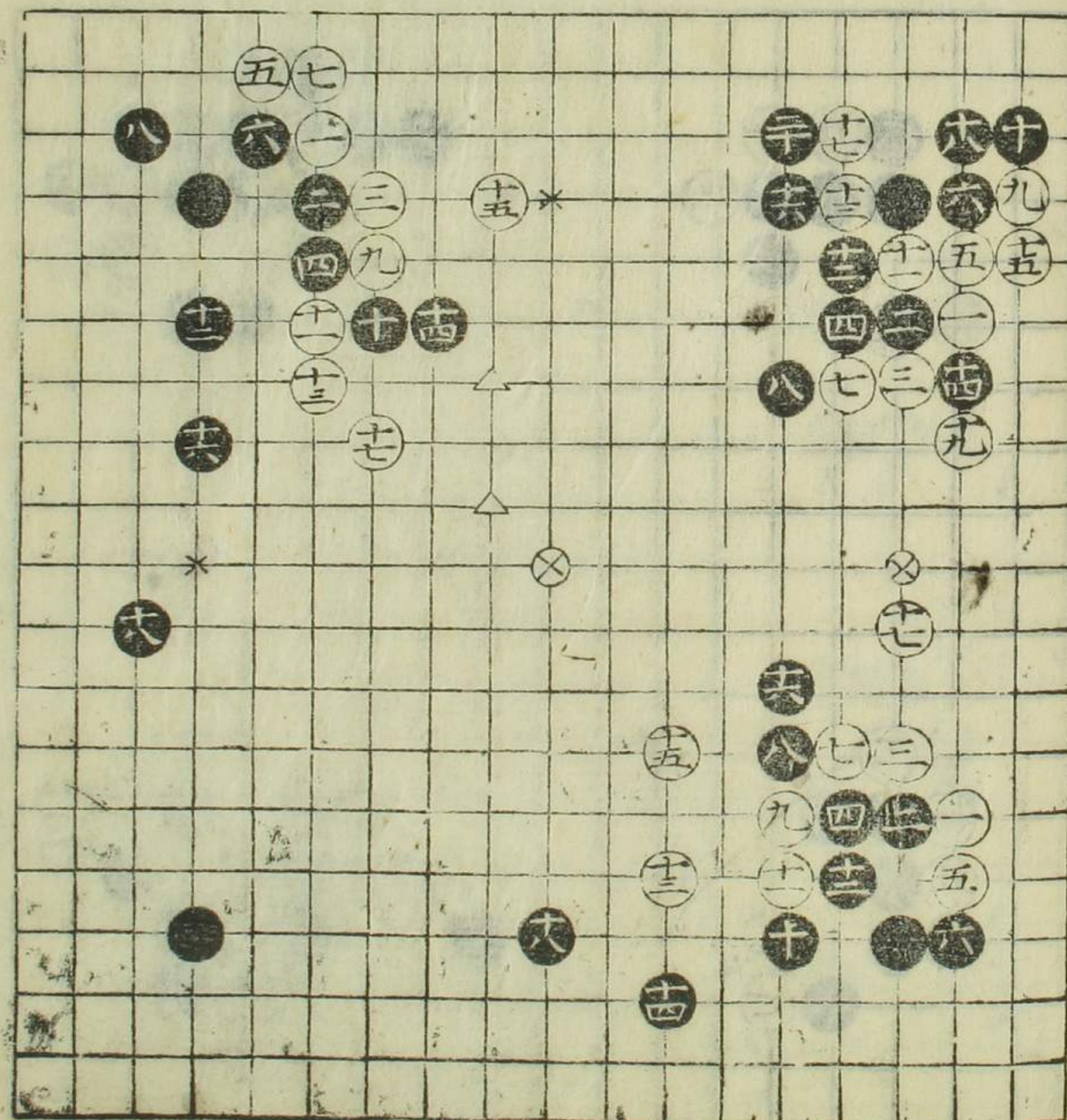


去之隅黒八ノ手ニ
テ白ノ十一ノ所工
打モヨシ此形ハ至
テ堅チ専一トスル
ナリ

置テハ必可然

國味博士大卦二
子數十六點冲

隅十ト十四ノ二月
ヲ捨テ不苦但五子
ノトキハ○印二置
石アル故十八ノ手
ヨ△印工尖テヨレ
去隅十六ノ手○印
ニ置石アルトキハ
十七、所工打テ上
ノ二目ヲ征ニ掛ル
ナリ一ツノ打方ヲ
二度記スハ愚ニ似
タレドモ四子ト六
子ノ違チ表スルミ

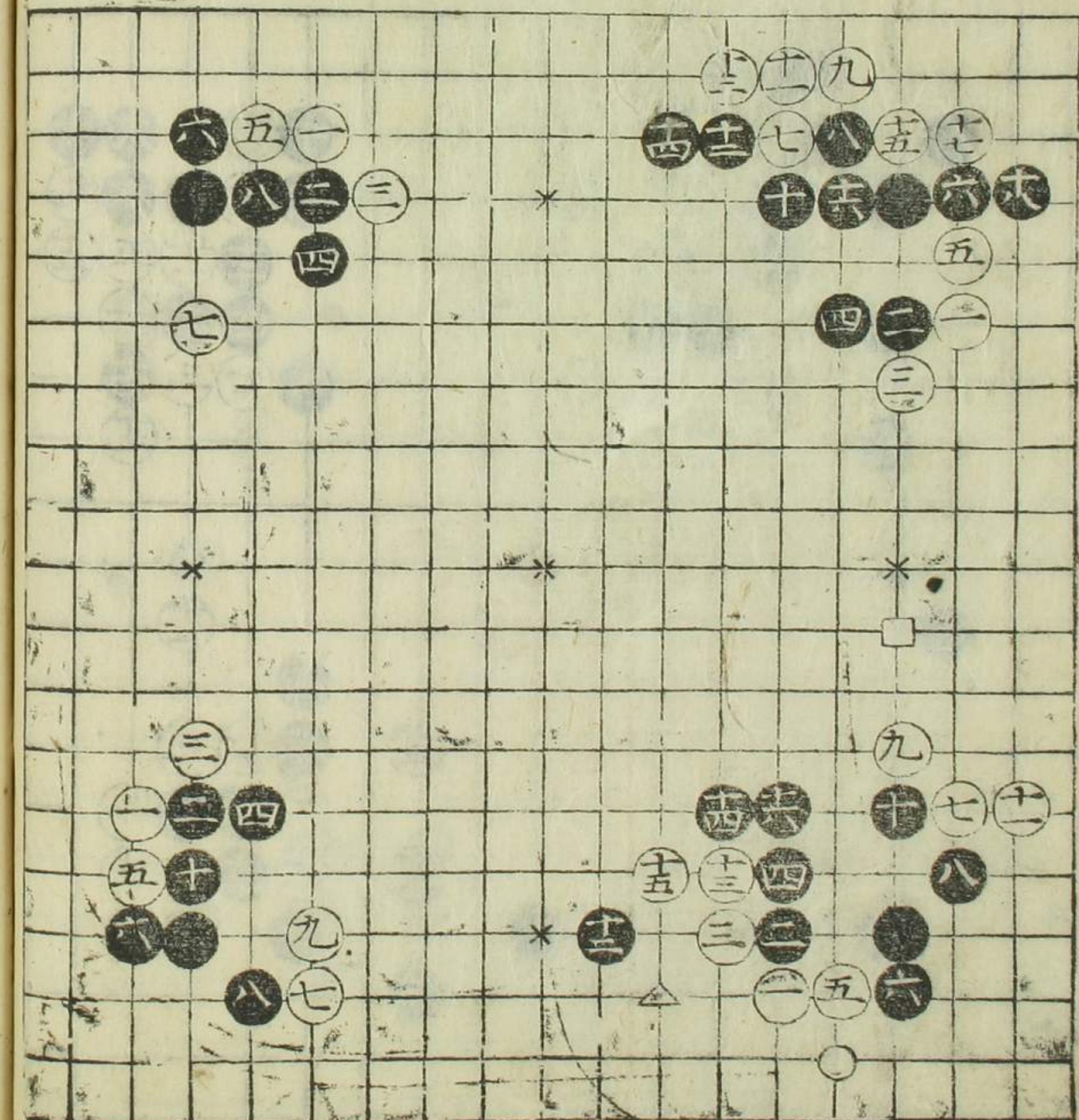
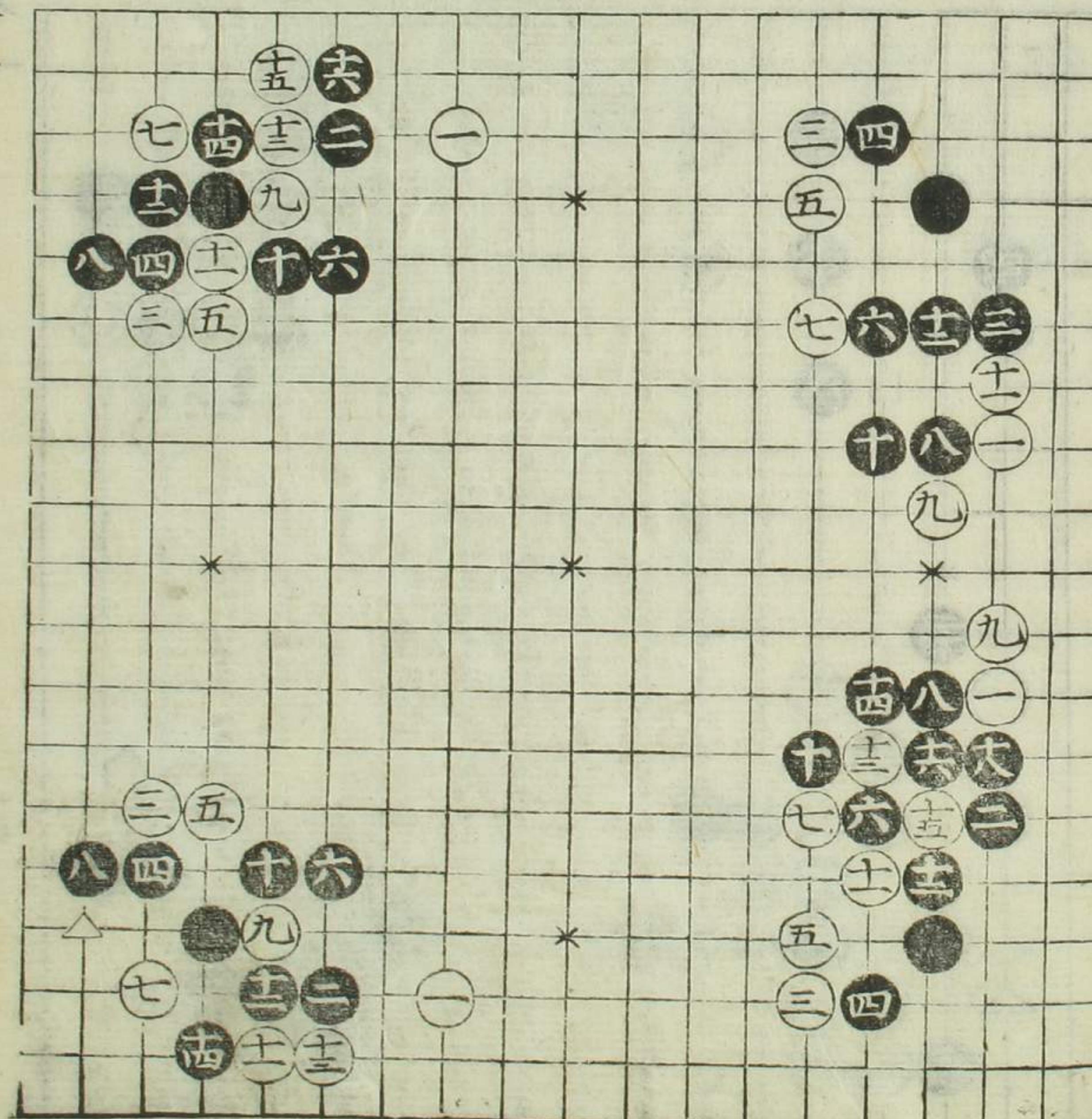


去隅白九十一、二手無理ナリ黒十二大ニヨシ如是ニテ八十
二分ノ勢也

隅黒十六ヨシ此後
白△印杯ニ打来ル
トキハ黒□印之邊
工打テ必レモ十二
ノ一手ハ捨石様ニ
心得テ間次第○印
エ一寸ハ子ルヲ輕
クレテ能手ト可知
初進深味セヨ

平上
両隅共黒ハノ手多
ハ△印エ打方ヨ
ケレトモ全ノ初發
ニセト打來ルトキハ
如是打テヨシ
去入
両隅共黒ハノ手ハ
少シモ絃ナクレテ
ヨキ請方ト可知

卷之二十一



隅黒六ノ手一ト二ノ
二手無之時ハ八ノ
处工打白七ノ所ヨ
粘其トキ△印工可
尖ニノ小斜走故如
是折テヨレ

隅八ノ手 □印工打
テモヨレ

兩隅共黒駿キ徳也

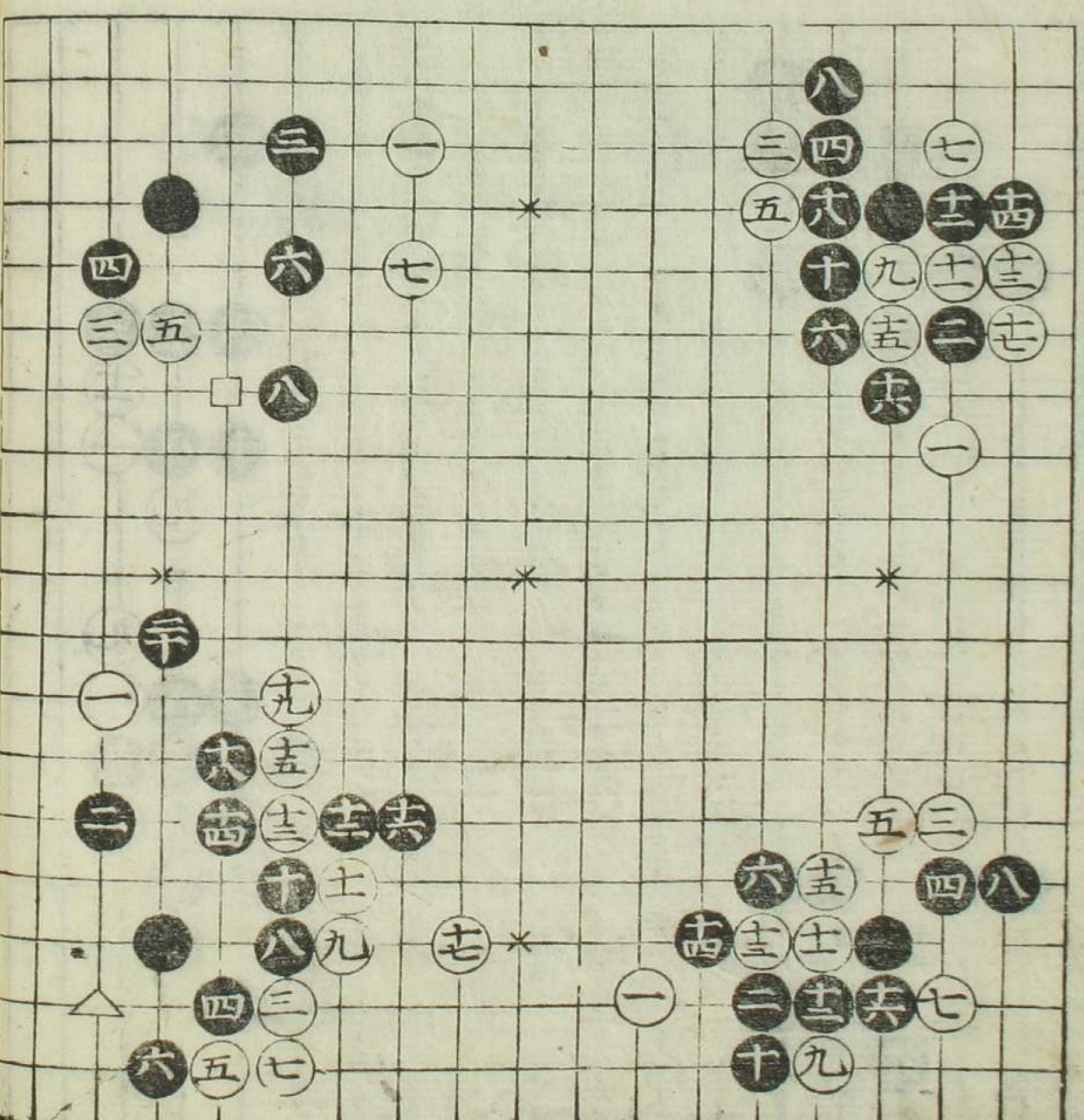
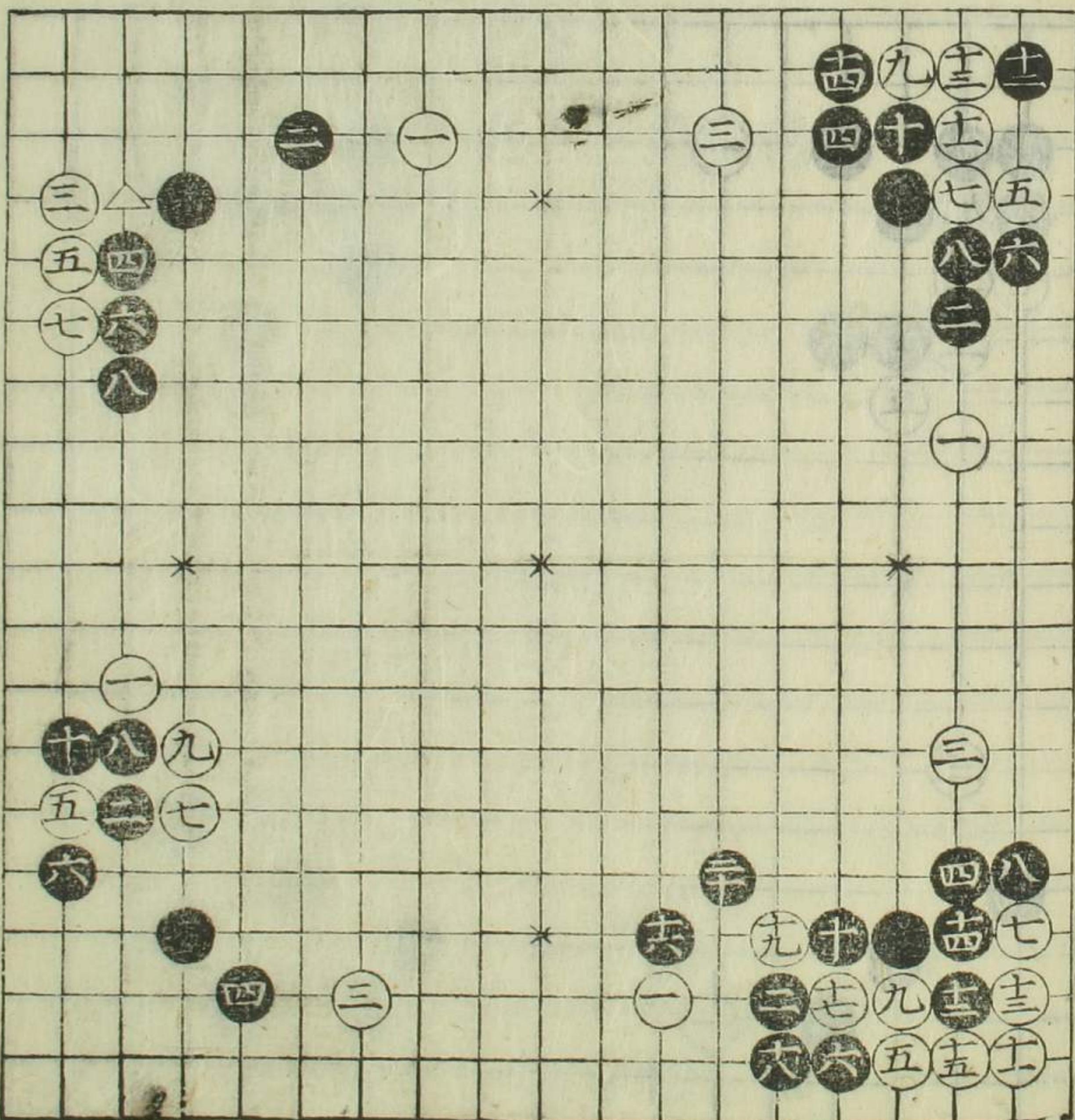
上

平
平土
西附共黒ハ平變

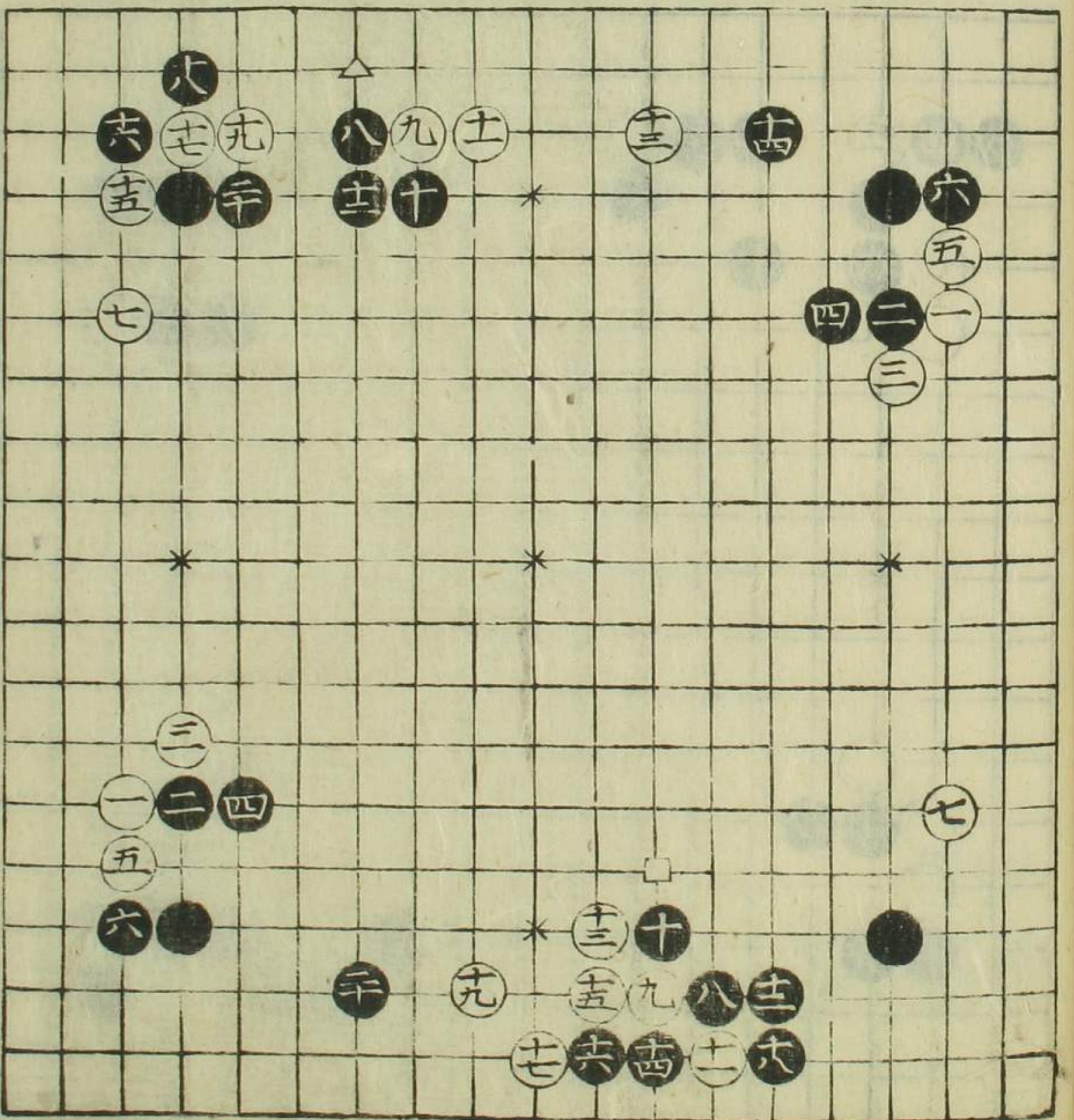
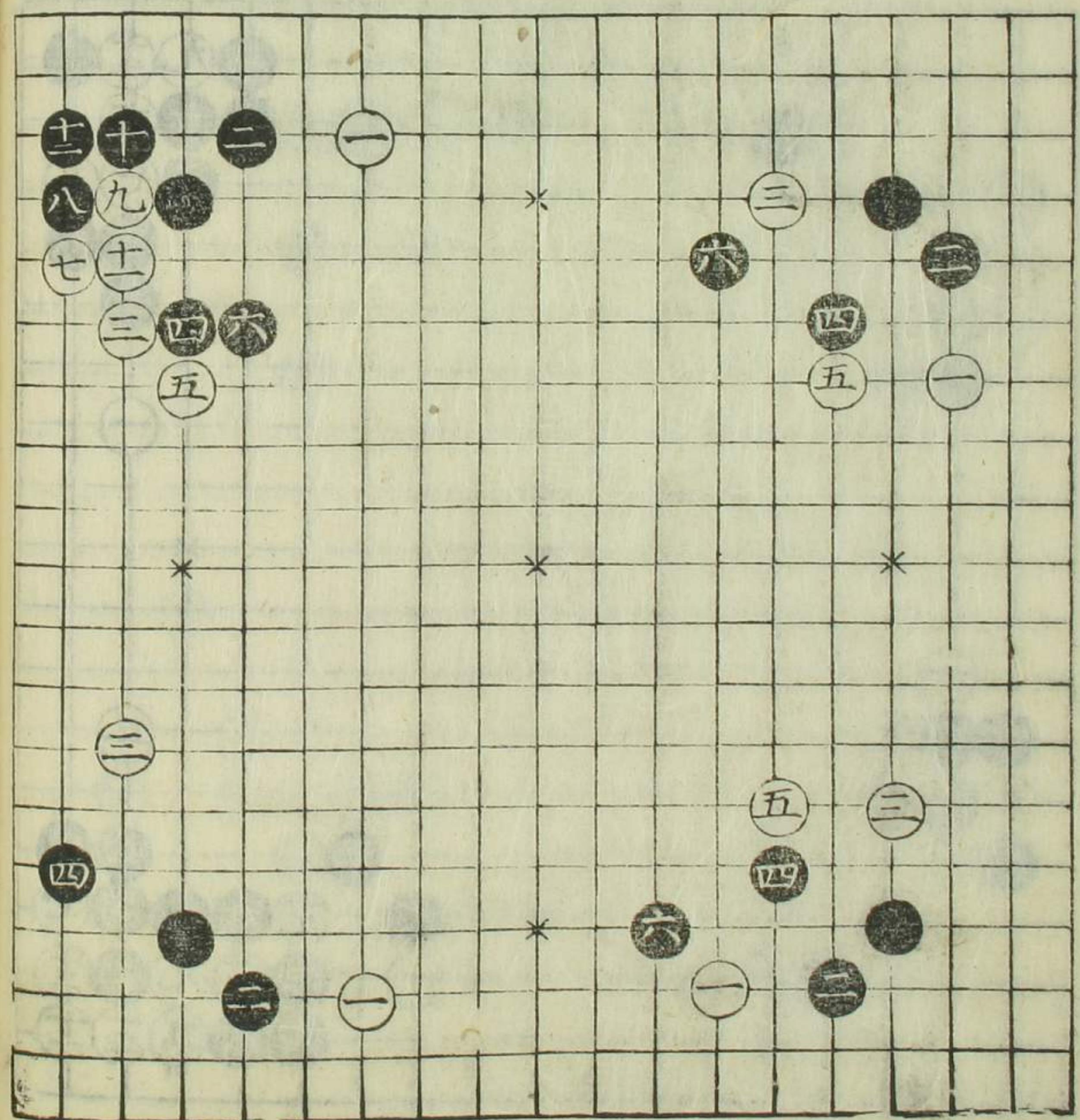
白五ノ附甚早ケレ
トモ唯黒ノ請方ヲ
記而己

黒四ノ手昔ヨリ△
印工打來トモ余惟
ニ如是方無絲レテ

可然
去入
黒大ニヨレ



上八ノ手ニノ石有ト
キハヨレニノ石ナキト
キハ矢張十一ノ处エ
可寺
残三隅ハ尤常法
ナリ



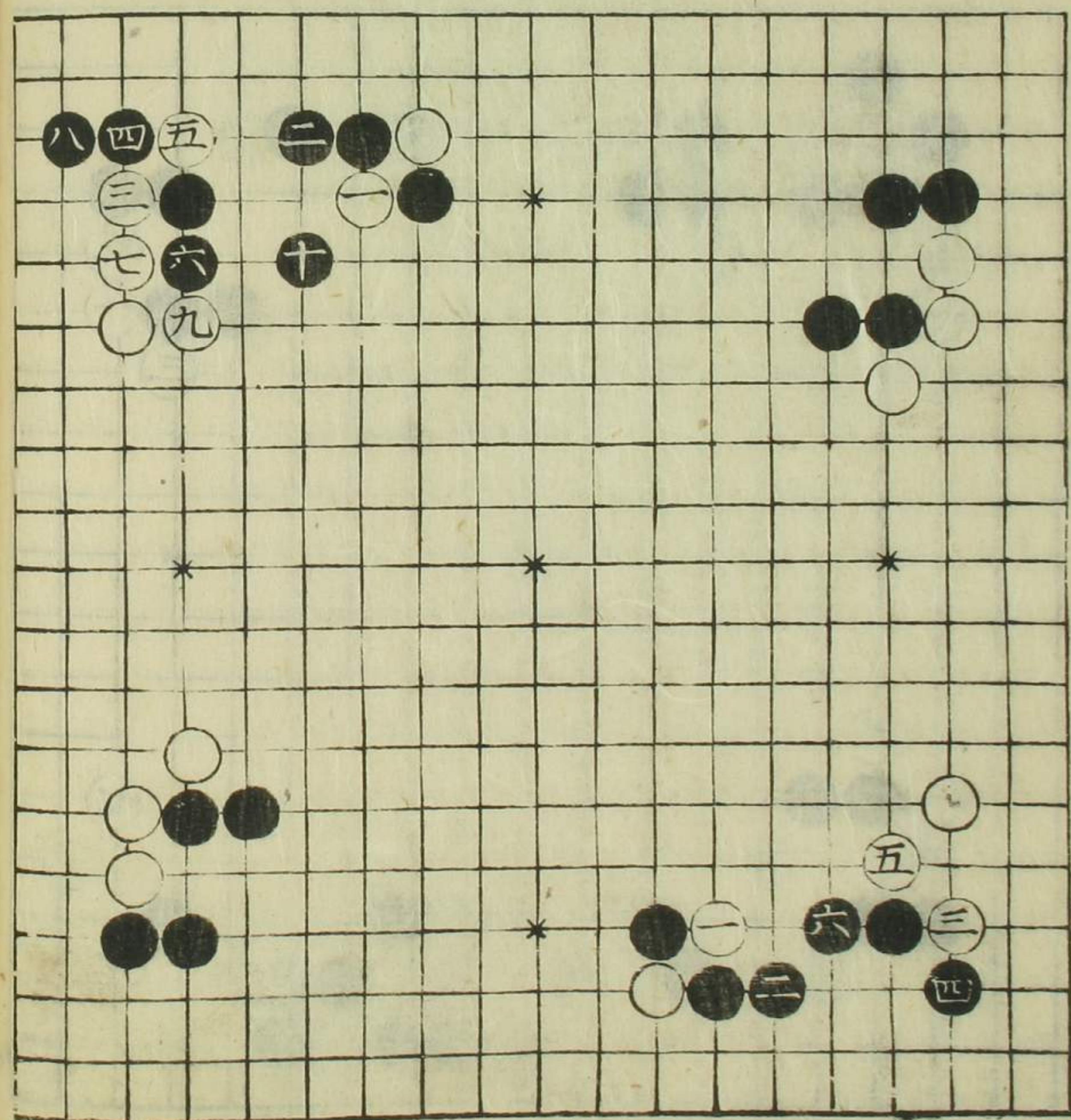
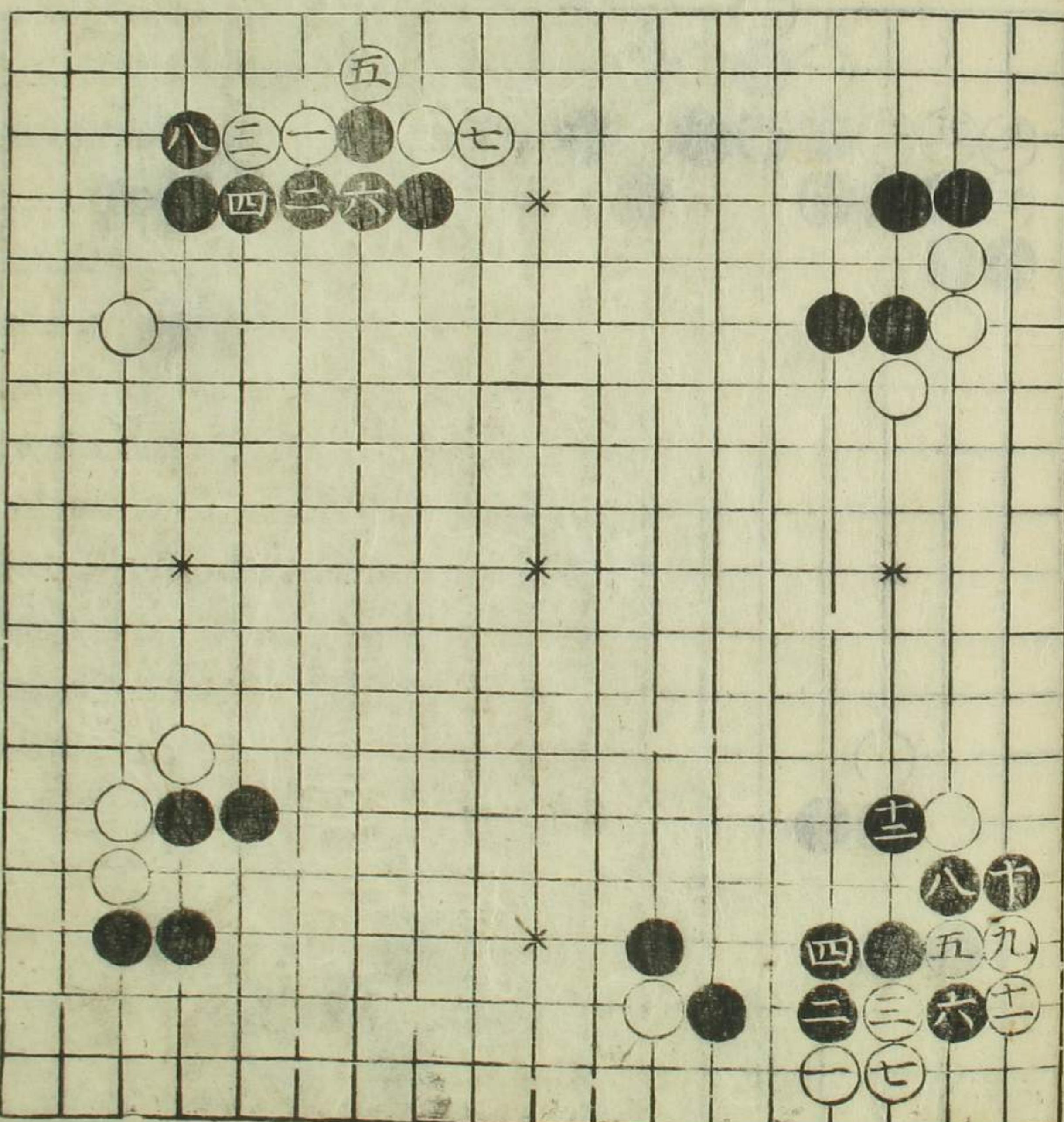
上隅黒十二ノ手昔
ヨリ△印工打來レ
ドモ如是粘方堅シ
テ可然

下隅黒十四ノ手昔
ヨリ□印工打來レ
ドモ余考ルニ此方
軽ク徳ニシテ可然

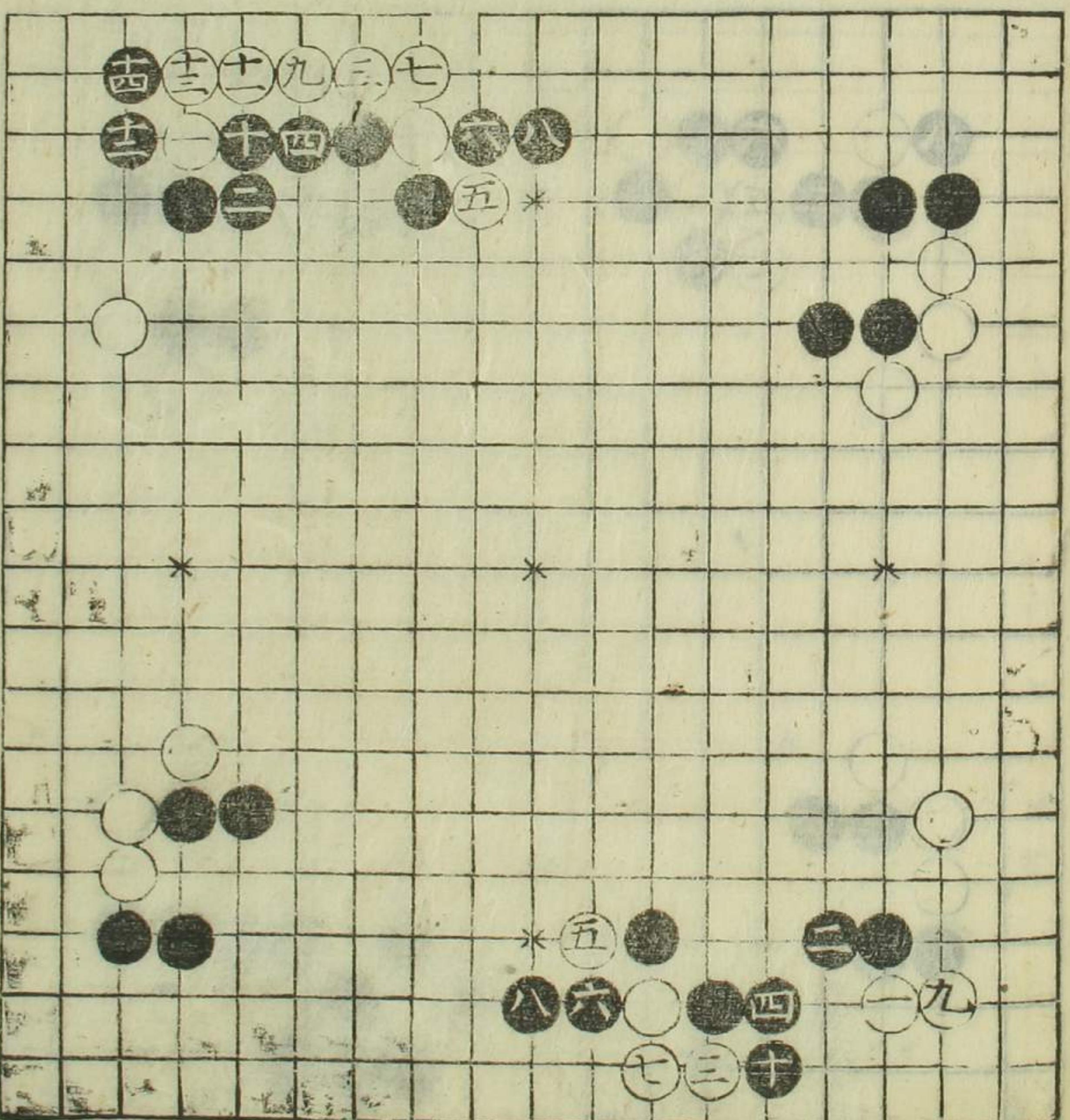
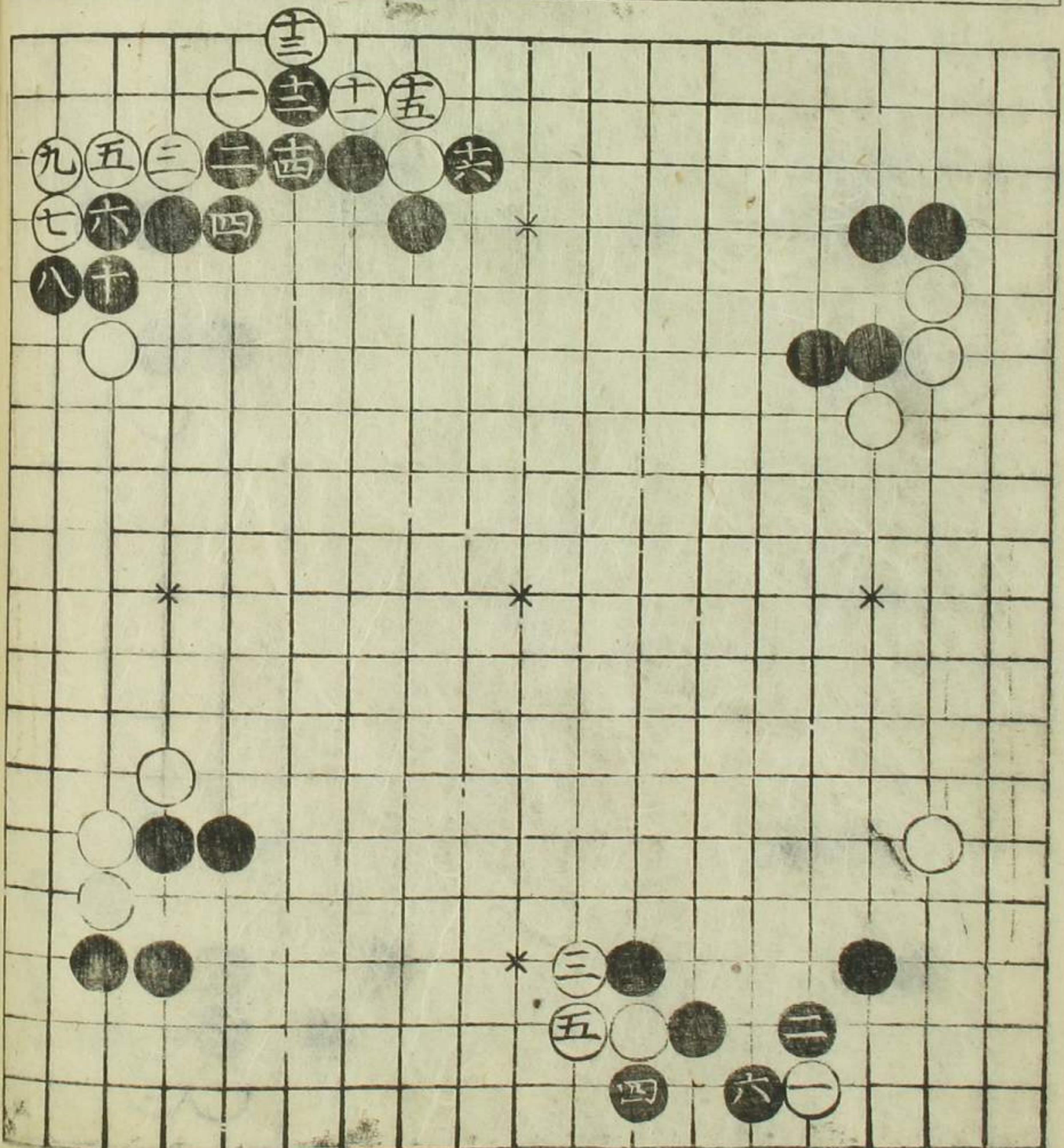
中古ヨリ尋常ノ
打方ナリ

上
白ノ石ヲ盤レテ
如是打心得尤ヨレ

入
隅二ト打四ト粘テ
少モ上手ニサカラ
ハズ奇心得大ニヨ
シ隅工打込来ルト
キ活スチ可悦一手
モ取度ト云一念起
ルトキハ必々大敗之
基ト可知



兩隅黒尤ヨレ就中
入ノ方四ト六ノニ
手輕シテ大ニヨレ

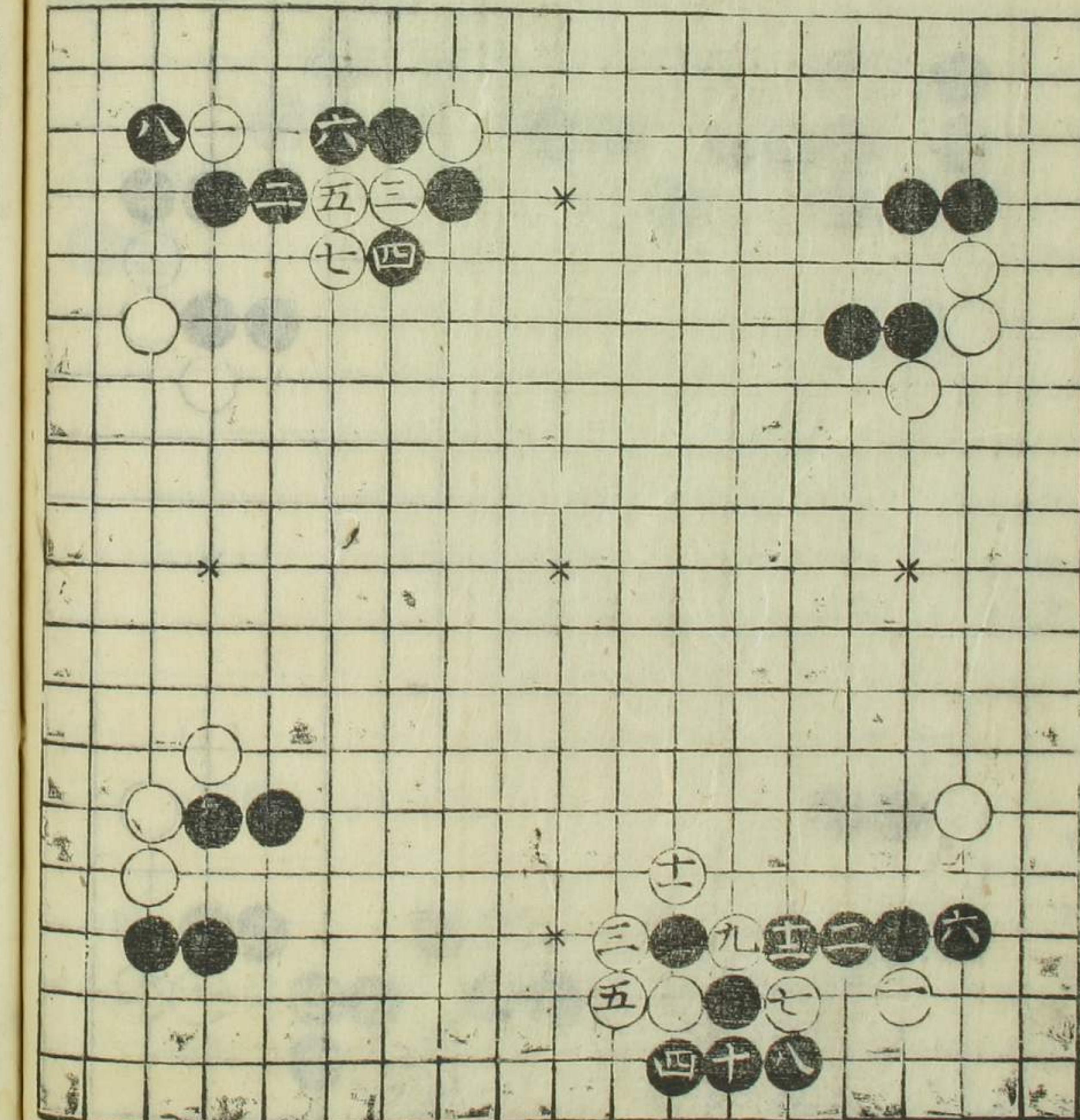
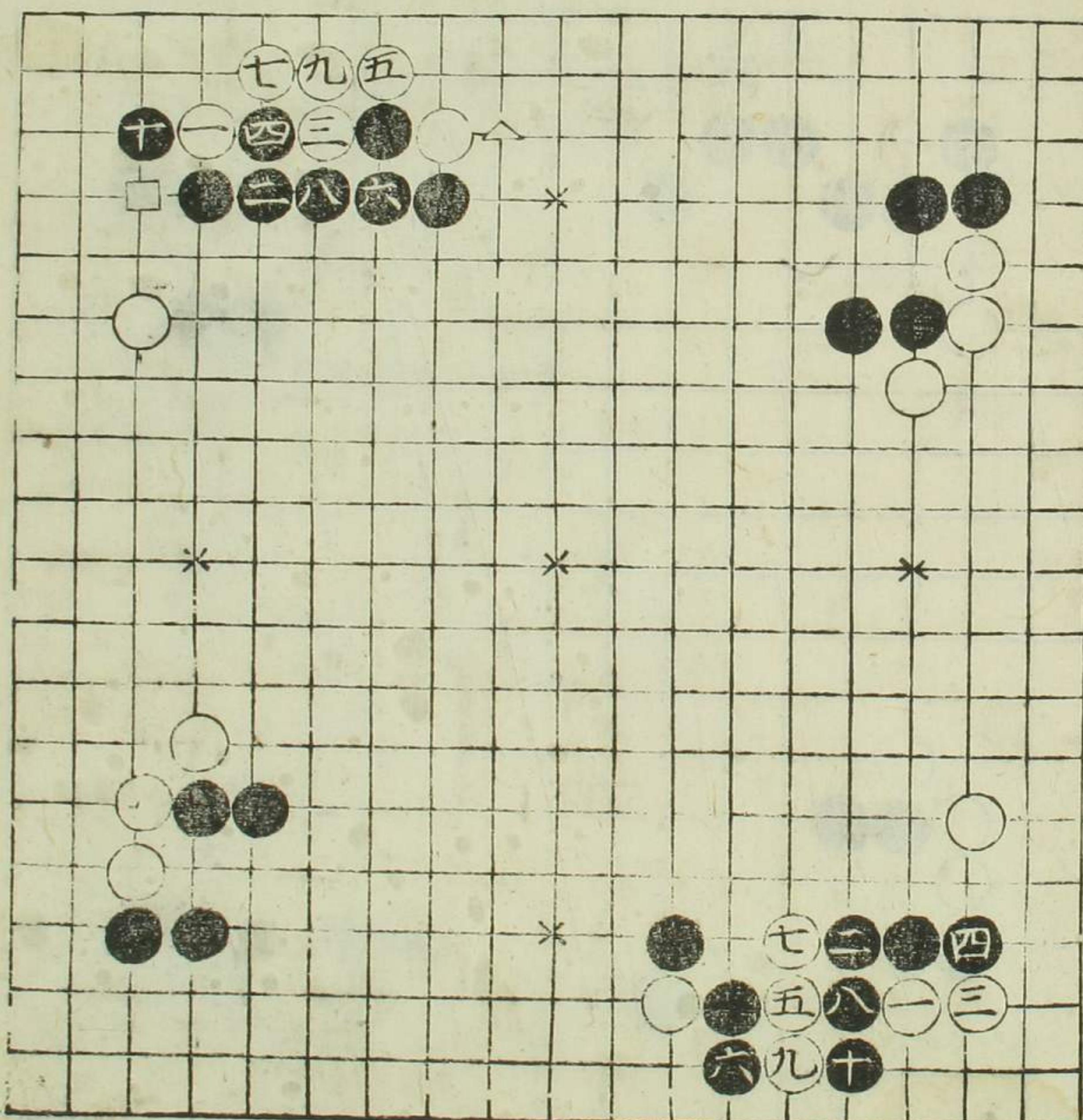


上
隅黒大ニヨレ

隅四十ノ打方余
新工夫徳、上無紛
シテ可然歟

上
黒十ノ手△印工打
白十ノ处工打黒口
印エ打テモ堅クレテ
ヨレ

丁、
六十下フニレテ七ノ
處エキハ則上ノ如
評ナルナリ何ニテ
モ不苦



黒四ノ手ヲ五ノ所至
寺ハ古風ニナルナリ
何レモ不苦

